

41478

教科書文庫

4
810
41-1941
20000 40727

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

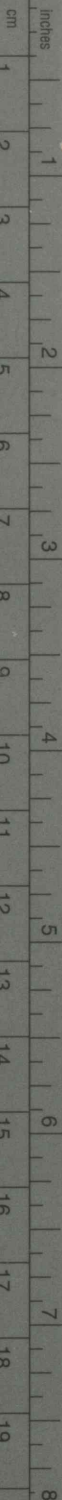


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



新編 中等國語讀本

新制版

卷二



日三十二月八年六十和昭  
**濟定檢省部文**  
用科文漢語國校學中

教科書文庫  
4  
810  
41-1941  
2000040727

資料室

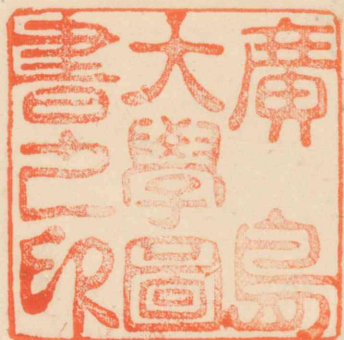
3759  
Ka14

# 新編 中等國語讀本

編者  
金子元臣

新制版

広島大学図書  
2000040727  

卷二目次

一 聖徳を仰ぎて……………	二 荒芳徳……………	一
二 昭和の大御代(詩)……………	三 木露風……………	三
三 大海の日出……………	徳富蘆花……………	一五
四 吾輩は猫である……………	夏目漱石……………	一九
五 蟻と蜜蜂と鳩……………	鶴見祐輔……………	二七
六 忍 耐……………	武藤山治……………	三六
七 邯鄲の夢……………	松 井 等……………	三九
八 希 望(詩)……………	西條八十……………	四七
九 智仁勇の名將……………	八波則吉……………	四九
一、道 雪……………		四九

二、武 勇	五二
三、仁 愛	五四
四、義 俠	五五
一〇 忠君愛國	芳賀 矢一……五八
一一 茶碗の茶	南條 文雄……六五
一二 茶の花	薄田 泣菫……六八
一三 豊太閤	矢野 文雄……七一
一四 機智縦横	……七八
一、百人一首の對句	……七八
二、羽織と袴	……七九
三、姨捨山の月	……七九
一五 森の繪	吉村 冬彦……八一

一六 猿の話	長尾 宏也……八九
一七 無類の的	五十嵐 力……九八
一八 格言五則	……一〇二
一九 紋 章	沼田 頼輔……一〇三
二〇 日章旗	松波 仁一郎……一〇三
二一 胡頹子	新井 白石……一〇七
二二 五兵衛大明神	その一……一〇三
二三 同	その二……一〇八
二四 箱根より(書簡)	窪田 空穂……一〇六
二五 蟲出づる頃	横山 桐郎……一〇〇
二六 藤蔓と檜の木	八波 則吉……一〇八
二七 京都の春	大和田 建樹……一五五

二八	ただの人(今様).....	一六〇
二九	西郷南洲.....	勝海舟.....一六三
三〇	開口録.....	一六五
	一、蜈蚣期に後る.....	(前戲録).....一六五
	二、雀を捕る術.....	開口新語.....一六六
三一	花に教へられて.....	篠原温亭.....一六七
三二	安宅.....	坪内逍遙.....一七三

附録 國語假名遣一覽



話の猿 六一

(筆楊華山) 猿



新編 中等國語讀本(新制版)卷二

一 聖徳を仰ぎて

天皇陛下  
今上陛下。

天皇陛下には明治三十四年四月二十九日、青山なる東宮御所に於いて御降誕遊ばされました。それは晴れ渡つて一點の雲もなく、星辰輝輝たる午後十時十分のことで御座いました。五月五日、明治天皇は時の侍従長徳大寺實則侯を御所に遣はされて、「迪宮裕仁」と御命名の御儀を擧げさせられました。

徳大寺實則

公爵、大勳位。

大正八年六月薨

す。(二四九九年

―二五七九年)

乃木大將  
伯爵。乃木希典。  
陸軍大將。大正  
元年九月薨す。  
(二五〇九年—  
二五七二年)

明治四十一年四月御歳八歳をもつて學習院初等科に御入學遊ばされました。當時の院長は乃木大將で、陛下の御教育に身をもつて當られました。御同級には華頂宮博忠王殿下、久邇宮邦久王殿下が御在學でありました。陛下にはお徒歩で、毎日、御殿より四谷仲町の學習院まで御通學になつたので御座います。

乃木大將のことを「院長閣下」と呼ばせ給ひ、御學友に對しても極めておやさしく、若し病氣などで缺席する者がありました場合には、いたく御心を惱まさせられ、後日登校の節は、必ず「もうなほつたか」といふやうなお言葉を賜はるのが常で、その都度、御學友は眞に身にしみて有り難く存じ上げ

都度

たので御座います。

當時の御日常を拜しますれば、午前六時に御起床になりまして、直ちに御洗面の上、更に淨水をもつて御手洗を遊ばされ、御拜の間に入らせられました。先づ皇大神宮を始め奉り、宮城なる明治天皇、昭憲皇太后に御遙拜を遊ばされ、更に御兩親陛下に御拜の後、御朝餐をおとりになりました。規則通りの御日課をお修めになるので御座いました。

御學業については、すべての科目に御熱心であらせられました。が、わけて博物には御興味をお持ち遊ばしまして、魚介、鳥獸、草木、鑛物等を御採集になり、これを一一御躬ら御分類、御整理遊ばされました。又求知心に富ませられまして、御

餐

獸

沼津  
静岡縣沼津市。

凱旋

記憶

散策の時です。常にも御心を學問にお注ぎになりました。一例を申し上げますと、御轉地先である沼津の桃郷附近に一つの凱旋記念碑があるのを御覽になつて、小さな御手帳をポケットからお取り出し遊ばして、碑文中のやさしい漢字などをお楽しげにお書き取りになつたことが御座いました。それ故、學校で御習得の漢字なども字畫正しく御記憶になり、そして又よくこれを御使用になりました。

陛下の御記憶力の勝れさせ給ふことは、御幼少の時から既に人の驚歎し奉る所でありまして、學業課程に關しては勿論、他より聞かせられた談話等も、よくそれぞれ御記憶になりました。又創造のお力に富ませられて、御在學中に、新イ

構想

鮠

ソップ物語の御創作が御座います。これは陛下が「ソップ物語」を御愛讀になつて、それから御構想を得られたものであります。その中に「鮠」と「蛙」の一節がありますが、それは鮠がひでりで水がなくて非常に苦しんでゐるのを、蛙が見つけて氣の毒に思ひ、水のある所まで連れて行つて助けてやるといふ筋で、既に帝王としての御仁愛の御きざしが、この御時代に拜せられるので御座います。

御日記は御幼少の頃から既にお始めになつて、興味ある出來事は常にお書留になられました。が大正三年頃よりは、日日正しく御記入遊ばされ、怠らず御繼續遊ばして居られました。

繼續



撮影

嗜好

補遺

寫眞の御撮影もお好みになり、修學旅行、郊外見學などの折折には、お手づから御撮影になつて、丁寧<sup>ていねい</sup>に御整理遊ばされ、説明書をも加へられて御保存になるのが例でありまして、これは一面御嗜好による御慰みではありますが、又他面に於いて御日記の補遺として附け加へられたもので御座います。

遊戯

御運動としては、御幼少時代から各種の方面に御興味をお持ちになつていらせられました。殊に人取遊戯、手巾拔、三色旗、軍艦遊び、角力等をお好みになりました。稍、御成長の後には木劍體操、乗馬、擊劍などを遊ばされ、御學友と共にその技を練らせられました。又可憐なお伽遊戯などもお好みにな

蟹

棋碁

賭

つて、猿蟹合戦、桃太郎、浦島太郎、それからイソップ物語中の表情遊戯なども、屢お繰り返しになりました。室内の遊戯としましては、言ひ廻し遊戯、行軍將棋、軍隊合せ、雙六、鬪球盤などもお好みになりました。

かくて大正三年四月二日、陛下には學習院初等科の御課程を御卒業遊ばされたので、更に進んで御勉學あらせられるため、高輪御所内に東宮御學問所が設置されました。

そして御父陛下には、御學問所總裁に東郷元帥を御任命になりました。かやうにして、陛下は學習院時代には乃木大將に、御學問所時代には東郷元帥に御傳育をお受け遊ばしたので、御座います。明治時代の日本が國を賭して戦つた二

二大戦役  
明治二十七八年  
の日清戦役と  
三十七八年の  
露戦役。  
夢寐  
兢兢

標本

大戦役に幾萬の忠烈な同胞を率ゐて決戦の衝に當り、國家興廢の一大事を雙肩に擔つて、全日本國民の信賴を一身に集めたこの海陸の二大將が、身命を捧げて夢寐の間も兢兢として皇儲の君の御教育に盡された苦心は、我我國民の一員として最も深い感銘を捧ぐるもので御座います。  
御學問所の終頃には、各地方を御旅行、御見學遊ばされて、親しく民情を御視察になり、又皇大神宮を始として、山陵、社寺等に御參拜遊ばされ、或は各地の史蹟、名勝の御探勝、或は動物、植物、礦物等の御採集など、各方面に渡つての御修養に努めさせられたので御座います。  
殊に博物學には御趣味をお持ちになりましたして、採集の標

蒐

鄭重  
纏

竝  
並

本類を蒐めて標本室をお設けになり、御躬ら一切の御整理を遊ばされ、且御幼少の頃から御使用遊ばされた玩具類等も一切鄭重に取り纏めて、この標本室に御保存になりました。嘗てお仕へ申し上げた保母などが御機嫌奉伺のため、參殿いたしますと、陛下はいつも保母等を此處にお連れになつて、色色の玩具の竝んだ前で、くさぐさの昔語を遊ばされたさうで御座います。  
この外、お庭には花園もあり、小鳥飼育場もあり、且又水族館もあつて、水中小動物などもお飼ひになりました。殊に御自作の農園を設けられましたして、御手づからいろいろなお野菜などを作らせられて、その初なりを御兩親陛下に御獻

態度  
措

上になるのを、この上ないお樂みと遊ばされました。  
又陛下には、御學問所に御在學中、御自分の御自由な御構  
想で、屢、御演説をお試みになりました。その題材は主として  
史傳中に古今東西の偉人を求められ、その言行について評  
論を遊ばされることが多かつたので、御座います。その御立  
派な御態度、堂堂たる御論旨には、常に御進講者の敬服して  
措かざる所でありましたことは、屢、私の洩れ承つたところ  
で御座います。

この御時代に日本歴史の御進講者が、  
「日本歴史を通じて最も御印象の深い事柄は何で御座い  
ますか。」

との御質問に、

「蒙古襲來の時に龜山上皇が身をもつて國難に代らんこ  
とを、皇大神宮に御祈願になつた事であります。」

と答へさせられたさうで御座います。又杉浦重剛（文政十

「御愛誦の章句は何で御座いますか。」

とおたづね申し上げたところ、即座に、

「禮記の『日月無私照』であります。」

と仰せられたさうで御座います。

又同じく御學問所時代のお話ですが、歴史の時間に御進  
講者が、

「仁徳天皇の御宇、民の疲弊がその極に達し、天皇は三年に

白鳥

杉浦重剛  
教育家。滋賀縣  
の人。東宮御學  
問所御用掛。日  
本中學校長。大  
正十三年歿す。  
(二五—五年—  
二五八四年)

疲弊

互一頁

互つて租税をお免じになるに至つた原因は何にあるので御座いませうか。

と御質問申し上げましたところ陛下には御一考の後

「それは三韓征伐に原因してゐるのでありませう。」

とお答になりましたので、孰れもかかる透徹した御答辯に驚歎し奉つたさうで御座います。

かくして陛下には御研學の功を積ませられましたので

たく御學問所の七箇年を御終了遊ばされたので御座いました。  
(三荒芳徳—聖徳を仰ぎて)

二荒芳徳  
伯爵。貴族院議員。東京帝國大學法科政治科出身。明治十九年一月生まる。

透徹

## 二 昭和の大御代

春光は天地に満ちあふれて、

日本の國國は花が咲き鳥が歌ふ。

嗚呼昭和の大御代は來つて、

安寧と福祉と希望とがある。

いと高きすめらみことの日の御子、

新たに帝位を嗣がせ給ひ、

その御心ひろく、

福祉

嗣

その御智あきらかにまします。

遠く海外の友邦を訪ひ給ふに、

日晴れて瑞象常にあふれたり。

今や玉と光る仁愛の御徳もて、

國を治め民を統べ給ふ。

瑞象

三木露風  
名は操。露風は  
その號。詩人。  
兵庫縣の人。明  
治二十二年生ま  
る。

ああ新帝登極の時は来る。

聖代に生まれたる國民は、

皇威を仰ぎ文化を進め、

この善き昭和の春を唱和せよ。(三木露風)

### 三 大海の日出

銚子  
千葉縣銚子市。  
利根川の河口に  
臨む。

ブルシャン・ブ  
リユー  
紺青色。

犬吠岬  
銚子の東南約四  
軒。

枕をうごかす濤聲に夢を破られ起つて戸を開きぬ。時は  
明治二十九年十一月四日の早曉、場所は銚子の水明樓にし  
て、樓下は直ちに太平洋なり。

午前四時過にもやあらん海上なほほの闇く、波の音のみ  
高し。東の空を望めば、水平線に沿うて燻りたる樺色の横た  
はるあり。上りては濃きブルシャン・ブリユー色の空となり、  
ここに一痕の弦月ありて黄金の弓を挂く。その光さやかに  
して、さながら東海を鎮するに似たり。左手に黒くさし出で  
たるは犬吠岬なり。岬端の燈臺には廻轉燈ありて、陸より海

環をえがく

剝

森茫

圈

にかけ頻りに白光の環をえがく。

暫くする程に、曉風冷冷として青黒き海原をはらひ來り  
夜の衣は東より次第に剝けて蒼白き曉の波を踏みて此方  
へ此方へと近寄る状も指點すべく磯の黒きに濤白く打ち  
かかるさまも漸く明かになりぬ。目をあぐれば黄金の弓と  
見えし月も何時か白銀の弓とかはり、燦りて見えし東の空  
も次第に澄みたる黄色を帯びぬ。森茫たる海原に立つ波の  
腹は黒うして背は蒼白く、夜の夢はなほ海の上にさまよへ  
ど、東の空すでに臉を開きて、太平洋の夜は今明けんとする  
なり。

すでにして曙光は花の發くが如く、圈波の廣まるが如く、

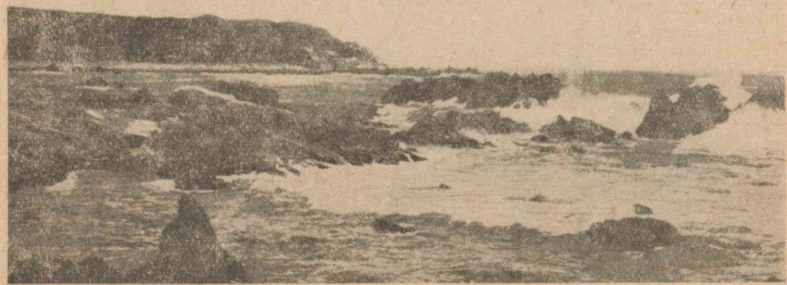
擴

臺—台

猩紅  
すは。や

空に水に擴がりゆきて、水いよいよ  
白く、東の空ますます黄ばみ、弦月も  
燈臺もわれと薄れゆきて、果はあり  
とも見えずなりぬ。この時、日の使と  
も覺しき渡鳥の一行、鳴きつれて海  
原を掠めて過ぐれば、波といふ波は、  
盡く東の方を顧み、一種待つあるさ  
ざめき、その聲四方に滿つ。

五分過ぎ、——十分過ぎぬ。東の空  
見る見る金光さし來り、忽然として  
猩紅の一點海端に浮み出でぬ。すは



岸 海 子 眺

拳

萬一方

忽焉

や日出でぬと思ふ間もなく、息をもつかせず、瞬く間もなく、海神が手もて撃ぐるままに水を出づる紅點は金線となり、黄金の櫛となり、金蹄となり、一搖して名残なく水を離れつ。水を離るるその時遅く萬斛の金たらたらと昇る日より滴りて、萬里一瞬、こなたを指して長蛇の如く大洋を走ると思へば、眼下の磯に忽焉として二丈ばかり黄金の雪を飛ばしぬ。(徳富蘆花——自然と人生)

濱に立ちて望めば落日海に流れてわが足下に到り、海上の舟は皆金光を放ち、逗子の濱一帯、山といはず、砂といはず、家といはず、松といはず、人といはず、轉がりたる生簀の籠も、落ち散りたる藁屑も、赫焉として燃えざるはなし。(徳富蘆花)

撥

讀一説

#### 四 吾輩は猫である



石漱目夏

吾輩は猫である。名前はまだ無い。吾輩がこの家へ住みこんだ當時は、主人以外のものには甚だ不人望であつた。どこへ行つても撥ねつけられて、相手にしてくれ手がなかつた。如何に珍重せられなかつたかは、今日に至るまで、名前さへ付けて貰はないのでも解る。吾輩は仕方がないから、出來得るかぎり、吾輩を容れてくれた主人の傍に居ることを勉めた。朝主人が新聞を讀む時は、必ず彼の膝の上に乗る。彼が晝寢をする時は、必ずその背中に乗

櫃  
縁側

る。これはあながち主人が好きといふ譯ではないが、別に構  
手が無かつたから、己むを得ぬのである。その後、色色經驗の  
上、朝は飯櫃の上、夜は炬燵の上、天氣のよい晝は縁側に寝る  
事とした。然し、一番心持の好いのは、夜に入つてここの家の  
子供の寢床にもぐり込んで、一緒に寝ることである。

牀  
床

この子供といふのは、五つと三つで、夜になると二人が一  
つ床にはひつて、一間に寝る。吾輩はいつでも、彼等の中間に  
おのれを容るべき餘地を見いだして、どうにか、かうにか割  
り込むのであるが、運悪く子供の一人が眼を醒ますが最後、  
大變な事になる。子供は「殊に小さい方が質が悪い」猫が  
來た。猫が來た」といつて、夜中でも何でも大きな聲で泣き出

來  
末

すのである。すると、例の神經胃弱性の主人は必ず眼を醒ま  
して、次の部屋から飛び出して来る。現に先達てなどは、物指  
で尻べたをひどく叩かれた。

斷  
斷

会

吾輩は、人間と同居して彼等を觀察すればする程、彼等は  
我儘なものだと斷言せざるを得ないやうになつた。ことに  
吾輩が時時同衾する子供の如きに至つては、言語道斷であ  
る。自分の勝手な時は、ひとを逆さにしたり、頭へ袋をかぶせ  
たり、抛り出したり、へつつひの中へ押し込んだりする。しか  
も、吾輩の方で少しでも手出しをしようものなら、家内總が  
かりで追ひ廻して迫害を加へる。この間も、一寸疊で爪を磨  
いだら、細君が非常に怒つて、それから容易に座敷へ入れな

へつつひ



顛へて

い。臺所の板の間で、ひとが顛へて居ても、一向平氣なものである。吾輩の尊敬する筋向うの白君などは、逢ふ度毎に、人間程不人情な者はないといつて居られる。白君は先日玉のやうな子猫を四匹産まれたのである。所が、その家の書生が三日目にそいつを裏の池へ持つて行つて、四匹ながら棄てて來たさうだ。白君は涙を流して、その一部始終を話した上、どうしても我等猫族が親子の愛を完くして、美しい家族的生活をするには、人間と戦つてこれを剿滅せねばならぬといはれた。一一尤の議論と思ふ。

又隣の三毛君などは、人間が所有權といふことを解して居ないといつて、大いに憤慨して居る。元來、我我同族間では

剿滅

憤慨

臍

權

訴へて

掠奪

目刺の頭でも、<sup>たう</sup>臍でも、一番先に見付けた者がこれを食ふ權利があるものとなつて居る。もし相手がこの規約を守らなければ、腕力に訴へてよい位のものだ。然るに、彼等人間は、毫もこの觀念がないと見えて、我等が見付けた御馳走は、必ず彼等のために掠奪せられるのである。彼等はその強を恃んで、正當に我等が食ひ得べき物を奪つて澄まして居る。白君は軍人の家に居り、三毛君は代言の主人を持つて居る。吾輩は學者の家に住んで居るだけ、こんな事に關すると、兩君よりもむしろ樂天的である。唯その日その日がどうかにかうにか送られればよい。いくら人間だつて、さういつまでも榮えることもあるまい。まあまあ氣を永く猫の時節を待

6

黒―黒

つがよからう。

しかし、吾輩は人間の不徳に就いて、これよりも數倍悲しむべき報道を耳にした。

或日例の如く、吾輩と車屋の黒とは暖かい茶畑の中で、寢轉びながら色色雑談をして居ると、彼はいつもの自慢話をさも新しさうに繰り返したあとで、吾輩に向つて下の如く質問した。おまへは今までに鼠を何匹捕つたことがある。知識は黒よりも餘程發達して居るつもりだが、腕力と勇氣とに至つては、到底黒の比較にはならないと覺悟はして居たものの、この間に接した時は、流石にきまりが好くはなかつた。けれども事實は事實で、詐る譯には行かないから、吾輩は

比較

いつはる(詐)

穢―焰

喟然  
稼いで

「實は捕らう捕らうと思つて、まだ捕らない」と答へた。黒は彼の鼻の先からびんと突つ張つて居る長い鬚を、びりびりと震はせて、非常に笑つた。元來、黒は自慢をするだけに、どこか足りない所があつて、彼の氣燄を感じたやうに、咽喉をごろごろ鳴らして謹聽して居れば、甚だ御し易い猫である。君はあまり鼠を捕るのが名人で、鼠ばかり食ふものだから、そんなに肥つて色つやがいいのだらう。黒の御機嫌を取る爲のこの質問は、不思議にも反對の結果を呈出した。彼は喟然として大息していふ、考へると詰らない。いくら稼いで鼠を捕つたつて――一たい、人間程ふとい奴は世の中に居ないぜ。ひとの捕つた鼠をみんな取り上げやがつて、交番へ持つ

錢一匁

まうく(儲)

獵一猫  
夏目漱石  
文學者。東京の  
人。名は金之助。  
東京帝國大學講  
師を辭し東京朝  
日新聞社に入れ  
り。大正五年十  
二月歿す。(二五  
七年—二五七  
六年)

て行きやがる。交番ぢや誰が捕つたか分らないから、そのた  
んびに五錢づつくれるぢやないか。内の亭主なんかおれの  
御蔭でもう壹圓五拾錢位儲けて居やがる癖に、碌な物を食  
はせた事もありやしない。おい、人間といふもの、あ體のいい  
泥棒だぜ。さすが無學の黒もこの位の理窟は分ると見えて、  
頗る怒つた様子で背中の毛を逆立てて居る。吾輩は少少氣  
味が悪くなつたから、いい加減にその場を誤魔化して家へ  
歸つた。この時から、吾輩は決して鼠を捕るまいと決心した。  
然し黒の子分になつて鼠以外の御馳走を獵つてあるく事  
もしなかつた。御馳走を食ふよりも寝て居た方が氣樂でい  
い。(夏目漱石—吾輩は猫である)

### 五 蟻と蜜蜂と鳩

フランス人は勤勉な國民である、イギリス人も勤勉な人  
間である。然しどうもその勤勉さに違があるやうに思はれ  
てならない。勤勉といふこと自身に本質的な差がある譯は  
ない。然し英佛人の勤勉性の差別は、單に外形的な形式上の  
相違から來るのではあるまいか。然らばその國民性は如何  
様に違ふのであらう。こんなことを考へながら、自分はよく  
獨でパリの公園を歩いてゐた。更にこれにアメリカといふ  
國を今一つ加へて、三國を比較してみると、益、解らないこと  
ばかりであつた。

閃

その時に、ふとフランスの或小説中の言葉が頭に閃いた。



くパリ人の朝起の心持を寫してゐるやうに思はれた。そし

曰はく「フランス人は蜜蜂の如く  
勤勉に、イギリス人は蟻の如く精  
勵である」と。パリとロンドンとの  
生活を見てゐるうちに、この言葉  
の深い意味が日一日と自分の腦  
裏に深く沁みて行つた。晴れ渡つ  
た初夏の日の下に、花から花へ、寸  
隙もなく蜜を求めて翔つて行く  
可憐な蜜蜂の勤勉が、如何にもよ

裏裡

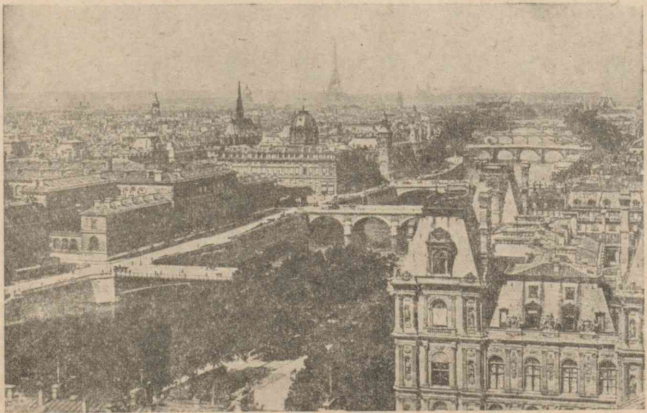
隙

摺

健氣

て來るべき冬の支度に忙しく、營營として重い荷を引き摺  
つて行く健氣な蟻の精根が、イギリ  
ス人の勤勉を現してゐるやうに思  
はれ出した。

それでは、アメリカ人のあのいら  
いらした忙しさは何であらうと考  
へてみた。自分の頭の中に、ふと淺草  
の觀音堂の前の鳩が浮んで來た。何  
時行つて見ても、大勢の人込みの中  
で幾百羽の鳩が我劣らじと押し合  
ひへし合ひ、地に落ちた豆を拾つてゐる。物音に飛び立たう



立たう

阿鼻叫喚

と半分氣を外に配りながら、それでも眼の前の豆粒は一つでも餘計に喰べようと目の色を變へて、永久にこつこつと餌を拾つてゐる。アメリカ人の勤勉は、この鳩のやうに忙しく餘裕なく自分には考へられた。朝の出勤時間にニューヨークの地下鐵道に乗る人は、これがこの世ながらの阿鼻叫喚かと思はれるやうな混雜を目撃する。

或日自分は鐵道の切符を買ひに市内營業所に行つた。大勢の客が群集してゐた。自分の受持の若いアメリカ人が、行先と列車とを聞き取つて、やがて右手の袖を一寸まくり上げて、鉛筆を持つたその手を、切符の紙の上で左右に五六回激しく振つた。何をするのかと呆氣に取られて見てゐると、

呆氣

戛

この男が忽ちその手を戛と紙の上に落して、するすると切符の文字を眼の廻るやうな早さで書き終つた。つまり只今手を振つたのはその手に運轉をつけたのである。自分は噴き出すやうな可笑味を感じた。何もさう手に運轉をつけずとも、大した時間の相違なく字が書けるであらうし、又運轉をつけてゐる時間だけ餘分のやうな氣がした。

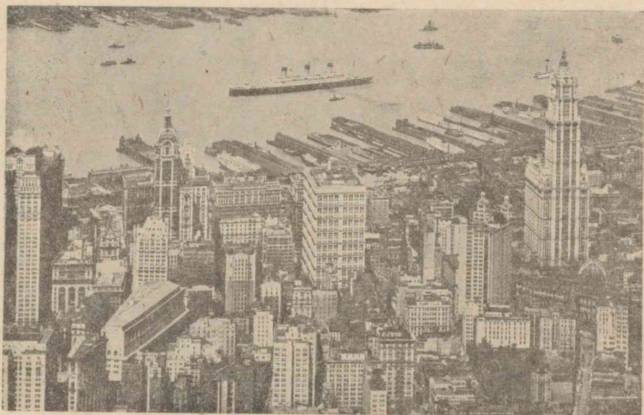
翌

その翌年、自分は英國の商務院の鐵道局で賃銀引上の數字表を貰つた。すると係の役人の若いイギリス紳士が、確にこの机に一枚だけ統計表を持つてゐる筈だからといつて、自分の机の抽出しをあげた。自分は見るともなくその抽出しの内を覗き込んでびつくりした。まあ何といふ書類の雜

抽出

雑沓

當惑



沓であらう、累累と色色な紙片が堆積してゐた。それを件の若紳士は手を突つ込んでがさがさと掻き廻して「此處にはない」といつて、次の抽出し、又次の抽出しを開けた。そして最後の抽出しの底からやつと件の賃銀表を出した。これは差上げる譯にはゆかないから見てくれまいか」といふから、「一度見てもとても覚えられませんね」といふと、一寸當惑して「それでは私が寫してあげよう」といつて、これを別の白紙に筆

寫し始めた。ニューヨークなら傍に坐つてゐるタイピストに命じて、一分間で寫しが出來上るところである。ところが件の英國紳士は、自分の机の上の大きな吸取紙の上に、先づ原本たる統計表を置いて、その又上に白紙を置いて書き出した。自分は一寸面くらつた形で、この奇妙な淨書法を見物してゐた。すると彼は白紙の上に數字を一行書いた。そして今度はその白紙を左手で持ち上げて、下になつてゐる原本を覗いて次の行の數字を諳記して、又件の白紙をその上にべたりと置いて諳記しただけ書いて、又前のやうに紙を持ち上げて原本を覗いて、又その上に重ねて書いた。不思議なやり方であると自分が感心して見てゐると、やがて暫くし

覗いて

て書き終つた。インキが乾いてゐない。そこで今度はその紙とその下の原本と二枚持ちあげて、一番下、積みになつてゐた吸取紙の上に裏向きに置いて、丁寧にインキを拭き取つて、さてと自分にその淨書をくれた。ニューヨークから著いたばかりの自分は、全く呆氣に取られて此處を出掛けた。そして何度となく鉛筆持つ手を振つて運轉をつけて、猛烈な勢で切符に文字を記入したアメリカ人と較べて考へて見た。

その春バリの郵便局へ書留小包を出しに行つた。慣れない自分が、誤つて受取人の欄へ自分の住所姓名、差出人の處へ相手方の住所姓名を書いた。それを小窓で出す時に、自分

抹殺

で氣が付いて、覺えず「おや」といふと、局員のフランス人が即座にペンを執つて、「受取人」といふ字をすうと抹殺して、わきに「差出人」と書き、差出人といふ字をすらりと消して、「受取人」と書いた。

なる程これで書類は完成した譯である。しかもそれがあつといふ一瞬間の事であつた。自分は全く感服してしまつた。

そしてニューヨークの切符賣と、ロンドンのお役人と、パリの郵便局員とを頭の中で並べてみた。鳩と蟻と蜜蜂と。

(鶴見祐輔「三都物語」)

鶴見祐輔  
衆議院議員、岡山縣の人。東京帝國大學英法科出身。明治十八年一月生まる。

### 六 忍 耐

聖 蚯蚓

掘 土 壤 考へ。

昔一人の男が、附近の野原一帶に、白堊の粉を或高さに撒きつめた。かの男は、蚯蚓は土を喰ひ、その土を地面へ吐き出すといふことを知り、どうかして、その地中に穿つ穴の深さを確かめたいと思つた。それには白堊の粉を地上に散布して置くと、蚯蚓が土壤に穴



治山藤武

を明ける度毎に、その白堊の粉はその蚯蚓の穴の中へ沈んで行くから、若し或期間を経てその土壤を掘つて見たら、これを知らることが出来ると考へたのである。彼は決して土壤



シャーレス・ダーウィン

シャーレス・ダー  
ウィン  
イギリスの博物  
學者。進化論の  
主唱者。(西曆一  
八〇九年—一八  
八二年)

を掘り返すことを急がなかつた。彼は再びその土壤を掘り返して見るまでに、二十九年の長年月を待つたのである。そして二十九年後に、その地帯一面の土壤を掘つて見て、蚯蚓が地中に掘る穴の深さは七寸である、といふ事實を確かめたのである。この男とは誰あらう、世界にその名を擧げた博物學者のシャーレス・ダーウィンであつた。彼はかかる非凡なる忍耐に依つて、何人も確知することの出来なかつた事實と眞理との發見に成功したのである。

又、世界的に有名な小説家である英國のホール・ケーンに



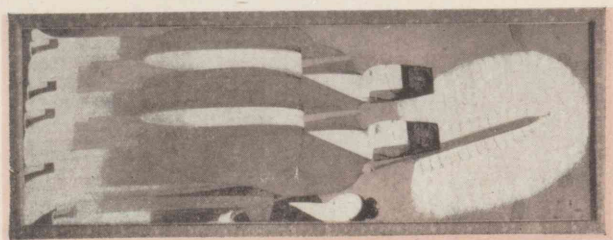
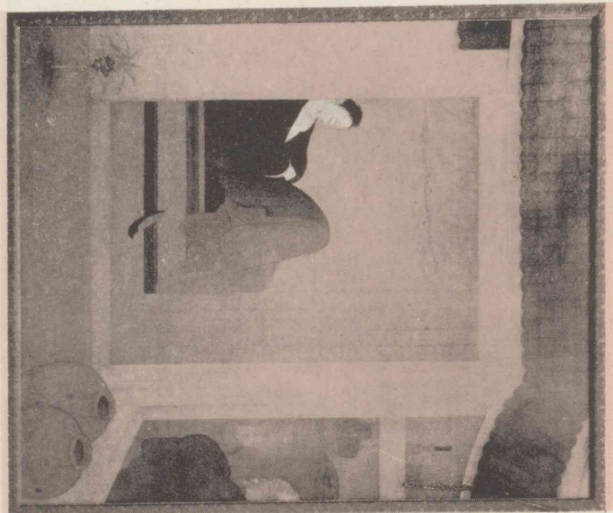
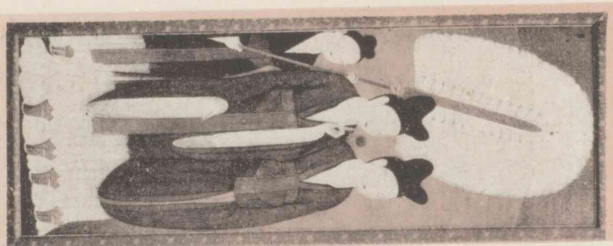
ホール・ケーン  
英國の小説家。  
初め建築家。(西  
曆一八五一年—  
一九三二年)

大 雁  
浩 瀚

武藤山治  
實業家。時事新  
報社長。岐阜縣  
の人。昭和九年  
歿す。(二五二  
七年—二五九四  
年)

就いても、かういふ實話が残されてゐる。彼が物した名小説は數多いが、その中にも「基督教徒」と題した彼の小説は、十九世紀中で最も多く讀まれ、世界の各國語に翻譯されたといはれるほどの名作で、ホール・ケーンはその爲に三箇年の日子を費した。そしてこの著作のノートだけでも、大樽に六荷といふ大雁なもので、しかも書き上げた浩瀚な原稿全部をば、三度彼は書き直して、やつと出来上つたものである。敢へて例を泰西に求めずとも、かういふことは我が邦にも少くない。否、世界共通のことであつて、一夜にして成る草は、一觸直ちに崩壊するところの草であるに過ぎない。

(武藤山治—武藤山治百話)



(筆有大井長) 部 部

開元  
唐の玄宗の時。  
我が聖武天皇の  
朝にあたる。  
邯鄲  
今の河北省邯鄲  
縣。  
すわる(坐)

## 七 邯鄲の夢

開元十九年の事です。呂翁といふ行者が邯鄲の町のあたりを通つて、ある宿屋に休みました。自分の床を用意して囊を背負つて坐りこみました。近所の若者で盧生といふ者が、見すばらしい風體で、小馬に乗つて田へ出る途中、これも同じ宿屋に立ち寄りしました。呂翁の傍に腰を掛けて、心安げに話し合ひました。

盧生は穢い自分の身なりを見廻してと息をつき、男と生まれながら不仕合な身の上で、ほんとに厭になつてしまふといふのを聞いた彼の老人、「お前さんの骨柄といひ肉附と

いひ元氣に充ちた男盛、さも氣樂さうに見えるのに、何をそんなに氣を腐らすかね」と尋ねました。

「ただ生きて居るといふだけで、ちつとも氣樂ぢやありませんや」と盧生がいへば、彼の翁、それだけ氣樂にして居れば、その上の氣樂はなからうぢやないか」といひました。盧生は重ねて、立身出世して、好き勝手に暮しが出來て、自分も満足し、側も賑へばこそ、それがほんとの氣樂といふものさ。わたしも學問や身だしなみを心がけて、末は貴人となるつもりで居たが、もう三十を越したのに、いまだに野らかせぎに追はれて居る。こんな不仕合があるものかね」といひながら、さも厭になつたといふ風で、ぐつたりしてゐました。

にぎはふ(賑)  
すゑ(末)

あるじ

囊

その時、宿のあるじが、粟を蒸して食事の支度をして居ましたが、呂翁は囊の中から枕を一つ取り出して盧生に渡し、「この枕をして、ちよつと寢て御覽。お前の思ふやうな身分になれるから」といひました。

その枕は燒物で、兩方の端に穴が開いて居ます。盧生は何の氣なしに、横になつて枕をしましたが、うとうとする中に枕の穴が次第に大きくなつて、中が明るく、廣廣してゐるやうに思はれたので、物好にすうつと這入つて見ました。するといつしか自分の家に來ました。

そして盧生は妻を娶り、贅澤に暮らしました。翌年進士の試験に優等で及第し、それから段段と立身を重ね、陝州の刺

陝州  
今の河南省の  
中。  
刺史  
唐代の地方官。  
今の府縣知事に  
あたる。

おほきく  
(大きく)

長安  
今の陝西省西安  
縣  
邊一辺

貶

史になつた折には、黄河の水運を改良して、土地の人から大層あり難がられました。やがて地方の大官から、轉轉して都の長安の司となり、更に夷狄征伐を命ぜられて大功を建て、北方邊土の住民に重んぜられました。その勲功に由つて、ますます出世しましたが、あまり評判が高いので、時の宰相に厭がられ、讒言されて役を貶されました。それも一時の事で、再び朝廷に召されて、自分が宰相の一人に加へられることになりました。

罹

宰相となつてからの評判も、すさまじい程であつたので、同僚の者に悪まれて謀叛の讒言に罹り、牢屋へ投げ込まれる事になりました。召捕の役人が飛び込んで來たので、盧生

あわて(慌て)

氣一気

は驚き慌てて、妻子に向つていふには、私の故郷は山東で、いくらかの田地もあり、暮しだけは立てて行けるのに、立身したさに、こんなはめになつてしまつた。あの氣安い身なりで、可愛い小馬に乗つて邯鄲のあたりをぶらつかうと思つても、もうだめだと泣きながら自殺しようと思つましたが、妻に押し止められてその場を逃れ、人にかくまはれて居る間、やつと罪を赦されました。

二三年経つ中に、無實の罪だといふことが分つて、又又立身して前に劣らぬ榮華を盡しました。子息は五人、孫が十餘人もできて、何不足なく遊び暮らしてのみ居るやうになりました。然しそれも限のある事とて、愈年を取つて來たので

壽一番

もう隱退しようと思ひましたが、天子の御許が出ません。その中に病氣になつて、上からの御見舞も手厚く戴きましたけれども、壽命ですから、もう自分もこれまでと覺悟して、天子へ上書して、かういふ事を申し上げました。

畑一畠

「私はもと山東の卑しい者で、田畑の稼業に身を入れて居りました。治まる御代のあり難く、私ごとき者まで役目を授かり、その上格別の御恩を受けました。或時は軍の指圖又或時は政治の頭と、役目大事に年を重ねました。大恩を戴きながら、何の目ぼしい手柄も立てず、只只御代に事無かれとのみ胸を痛めて居りました。さうして月日が積り積つて、私はもう八十を越えました。身も疲れ力も弛み、こ

弛

ひとへ(偏)

の上の御奉公は、何分にも心もとなく存じます。思へば、この身のふがひなさ、御報恩も思ふに任せず、このまま御別れ申し上げるのは、口惜しいとも残念とも申しやうがありません。偏に御察しを願ひ上げます。」  
これに對して、かういふ詔を下されました。

「これまでの忠勤、如何にも感じ入る。地方の事、政治の上、汝の功勞に由つて、世の太平も久しく續いた。近頃病氣の由、全快も程近からうと思つて居たに、氣の毒の至である。今見舞として使者をさし遣はす。十分加療して大切に致せ。一日も早く全快するやう、吉報を待つて居るぞよ。」

臨終の際にも、わが身の果報を思ひ返して、嬉しやと思ふ程

つかはす(遣)

も無く、遂に歸らぬ旅に出で立ちました。

夢心地の中に、盧生は欠伸をしながら眼を醒ましました。自分は今し方死んだと思つたのによく見ると、宿屋の中に轉つて居ります。呂翁もちやんと傍に居ります。あるじの粟はまだ蒸し上りません。どこを見廻しても元のままです。はつと思つて起き上り、そんなら今のは夢であつたかといひますと、呂翁は笑ひながら、「人の身の上もそんなものさ」と申しました。盧生はちつと考へ込みました。やがて語を改めて、「お蔭で何事も分りました。私の至らぬ慾念を塞いで下さつたのです。御意見はしみじみ胸にこたへました」といつて、丁寧（松井等傳説之支那）に挨拶して立ち去りました。

松井等  
東京の人。歴史家。東京帝國大學東洋史料出身。國學院大學教授。昭和十二年歿す。(二五三年) 一二五九七年

### 八 希 望

つねに楽しく微笑まん、  
希望は沖の帆のごとし。

夕べは闇にかくれても、  
朝となれば浮びいづ。

つねに楽しく微笑まん、  
希望は磯の草の花。

枯れて散り行く花かげに  
また新しき花はさく。

つねに楽しく微笑まん  
希望は濱の貝の殻。

ひとつを波が奪ふとき、  
ひとつを波が運びくる。

つねに楽しく微笑まん、  
希望は永久の不死鳥。

その翼もて翔るとき、  
わが世は若き春に満つ。

(西條八十國民詩集)

フェニックス  
ギリシャ神話に  
出る鳥。

西條八十  
詩人。早稻田大  
學教授。東京市  
の人。早稻田大  
學英文科出身。  
明治二十五年一  
月生まる。

割據

立花鑑連  
通稱孫次郎。道  
雪と號す。筑前  
の人。天正十三  
年九月歿す。(二  
一七三年—二二  
四五年)  
立花城  
今福岡縣粕屋郡  
青柳村に城址あ  
り。

## 九 智仁勇の名將

### 一、道 雪

戰國時代の事である。

群雄各地に割據して互に侵略を事とし、甲が倒れ乙が起り、變遷常なく、干戈一日も休むことがなかつた。永祿、元龜、天正の頃、野戰攻城三十七回、未だ曾て一度も敗北しなかつた。勇將がある。姓は立花、名は鑑連、筑前立花城の城主で、世には入道道雪の名で知られてゐる。

當時九州の南北に二豪族があつて、絶えず覇を争つてゐた。南は薩摩の島津氏で、北は豊後の大友氏である。九州の諸

耳川  
今の宮崎縣臼杵  
郡にあり。

城主は、島津氏か大友氏かその一に屬してゐた。立花城主鑑連は大友氏の身方であつた。ところが、天正六年鑑連が六十歳の年、大友氏は島津氏と日向の耳川で戦つて大敗した。島津氏の勢當るべからずと見て取つた北九州の諸城主は、皆大友氏に背いて島津氏に降つた。全く朝には秦に仕へ、暮には楚に仕へて、自家の安泰を謀らうとするのである。けれども、

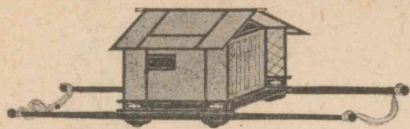
「倒れるなら、主家と共に倒れるまでだ。」

かういつて彼は動かなかつた。さうして、入道して名を道雪と改めた。その意味は、道に降つた雪は道で消える、大友氏に屬する自分は、大友氏の爲に死ぬるといふ、堅い決心を示した名前である。

二、武 勇

道雪がまだ若い時分の事。

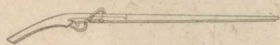
夏の日の暑い真最中、庭の木蔭でうとうととしてゐた時に、所謂青天の霹靂、びかり！光つたかと思ふ間もなく、かりかりつ！と耳を劈く音がして、眼前四尺足らずの處に落雷した。道雪は感電して身體の其處此處に負傷した。さうして足の負傷は一生癒らなかつた。足痿えの片輪になつた彼は、出陣の時は、必ず手輿に乗つて、部下を下知する事とした。手輿の中には、二尺七寸の名刀雷切と、種子島の鐵砲を入れ置き、別に三尺ばかりの棒を提げ、究竟の若武者百餘人を



霹靂  
手輿



種子島



左右に従へて、道雪はゆらりと手輿の中の人となる。  
 素破！戦が始まれば、道雪は左右の若武者に手輿を昇かせ、手に提げた棒で激しく手輿を敲き、「えいとう、えいとう」と掛聲かけて、手輿を敵の眞只中へ昇き込ませる。少しでも遅れると、割れよとばかり輿の前後を滅茶苦茶に打ち敲いて「えいとう、えいとう、えいとう、えいとう」と引つ切りなしに掛聲を掛ける。血氣盛んな若武者共はこの掛聲に勵まされて遮二無二、面も振らず敵陣目がけて割つて入る。

それ「えいとう」の聲が来た！と敵は怖ぢけてさつと退く身方の先陣はそれ「えいとう」の聲が来た！と喜び勇んで奮ひ立つ。猛虎が狂つて羊の群に驅け込んだやうに、道雪の手

無碍

輿が敵の中を縦横無碍に飛び廻る。

かうして瞬く間に、敵の本陣を亂すのであるが、若し萬一敵の備が嚴しくて、身方の先陣が追ひ立てられでもしようものなら、手輿の中の道雪が大音聲を張り上げて、「先づこの輿を昇き入れい！命が惜しくばそれから逃げい！」と、目を剥き出してはつたと睨む。睨まれた身方は、逃げるよりも恥だと、忽ち勢を盛り返して取つて返す。輿の左右の若武者共は勇氣日比に百倍して、韋駄天の如く驅けて、「えいとう、えいとう」の手輿を無二無三に敵陣に昇き込む。  
 かうして道雪は如何なる敵の堅陣をも、一舉に切り崩してしまふのであつた。

韋駄天

佛法守護の神。  
 俗に疾く走る神  
 といふ。



三、仁 愛

道雪は常にかういつてゐた。

「武士には本來弱い者はない筈だ。若し弱い者があつたらそれはその大將が悪いのだ。大將が武を勵まさない結果だ。他家に臆病な武士がゐたら、此方へよこして見るが好い、一年経たないうちに剛の者に鑄直してやる。」

彼は部下を我が子のやうに愛した。たまたま武功のない武士があれば、かういつて慰めた。

「手柄の有る無しは問題ではない。氣にするには及ばない。若し明日にでも軍へ出る時、朋輩にそそのかされて抜けがけなどして討死するなよ。功を急いで身を滅すのは不忠の

臆病

鑄

扱いて

至だ。お前達のやうな忠義な士卒があるからこそ、この不具な老體が、敵の眞中へ昇き込まれることが出来るのだ。」

若し又客の前などで不心得の者があれば、

「いや、この者は御覽の通りの不束者ではありませんが、これで軍に臨んでは火花を散らして戦ひます。槍は殊にこの者の得意で、かやうに構へて、りうりうと扱いて突きかかりますと、刃向ふ敵はありません。」

と、自ら槍を扱く眞似をして、お客に見せる。で、心得違をして恥ぢ入つてゐる武士を始め、竝み居る部下の面面は感涙に咽んで、この大將の爲には一命を捨てても惜しくはないと思ふ。

四、義 俠

しかし道雪は、卑劣な行爲を、蛇蝎の如く嫌つた。

永祿十年八月、道雪が古處山の城主秋月種實と對陣して、みた時の事である。一日道雪の家來が驅けて來て、

「御注進申し上げます。秋月の殿様が僧侶の姿に身を窺して、博多で芝居を見て居られます。某に命ぜられれば只一討に討ち取ります。實は先刻、今にも芝居小屋で討ち申さうと思ひましたが、一應御意を伺つてからと考へまして、——誠に千載一遇の好機です。」

「黙れ！」

道雪が大喝一聲、

古處山

今の福岡縣朝倉郡秋月村にあり。

秋月種實

島津氏に屬す。天正十五年豊臣秀吉に降る。

博多

今福岡市の内。

「おのれは卑劣な奴だ。秋月ほどの者をおのれ如き卑劣漢に頼んで欺し討する道雪と思ふか。きたないおのれが心底、武士の風上にも置けぬ奴。手討とは思ふが、命ばかりは助けてやる。」

と散散に吐り飛ばした。さうして、わざわざ敵將秋月種實に手紙を書いて、

「つけ狙ふ者もあるから、芝居見物などは慎まれるが好からう。」

といつて遣つた。(八波則吉詩味情味)

八波則吉  
國文學者。福岡縣の人。東京帝國大學國文科出身。

### 一〇 忠君愛國

余がドイツ留學中、或年の天長節の祝宴に、日本の近世史に關係あり、日本の勳章を佩びて居る男爵ジーボルト氏の演説を聽いて、その中の一節に感じた事がある。同氏の言は「西洋各國の革命は、國王に對する不滿から起つて、その結果は、いつも王室が權威を縮小し、或は全く顛覆するものであるが、日本のはこれに反して、政變毎に皇室の稜威を増し、繁榮を増進する」といふ意味であつた。これは如何にもよく、我が國體の萬國に異なることを言明したものといはねばならぬ。

稜威

大化改新

孝徳天皇の大化二年に行はる。氏族分權の制を改めて朝廷集權となすにありき。

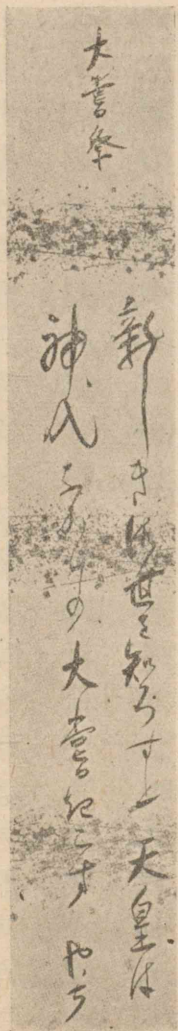
明治維新

明治天皇の明治元年、政權を皇室に復し給へり。

大嘗祭

新しき御世を知らすと天皇は神代ながらの大嘗きこそすやいぢ

かの大化改新といひ、明治維新といふ政治上の二大變動は、わが國なればこそ極めて容易に成就して、雨降つて地かたまるといふ結果が得られたのである。新しい文化に接して、これを採用する必要の生じた時、制度改正の詔敕が一度



筆一矢賀芳

煥發すれば、祖先以來の領土、領民もさし出し、既得、將來の權も悉く打ち棄てて、唯唯諾諾として大命を承るといふことは、決して外國人にはあり得べからざる事實である。これであればこそ、わが國民は萬世一系といふ國體を維持し、時代

おろか

の進歩に伴つて進歩したのである。かういふ場合には、外國では必ず國王と人民との衝突を免れぬ。一旦人民と衝突すれば、國王が散散な目に遭はせられた例は枚擧に違が無い。國外へ出奔する位はおろかなこと、遂には刑場に引き出され、斷頭臺上の露と消えるといふ、英國、佛國の歴史などは、日本人の目からは殆ど信ぜられぬ沙汰であつて、小學から中學にはひつて、初めて外國の歴史を學ぶものは、何人も必ず外國史に殘酷無道の事が多いのに驚くに相違ない。

元來革命といふ語は、天ノ命維レ革マル」といふ語から出たので、支那人は昔から、天子は天の命を受けて百姓を治めるものだといふ思想を根本として居る。それ故、聖人賢者た

天ノ命云云  
易の革の卦の  
辭。  
をさめる  
(治める)

二十五朝  
夏、殷、周、東  
周、秦、漢、東  
漢、蜀漢、晉、  
東晉、宋、齊、  
梁、陳、隋、唐、  
後梁、後唐、後  
晉、後漢、後周、  
宋、南宋、元、  
明。

かんがへ(考)

輿望

る以上は、誰が代つて天子になつても構はぬのである。これが爲に、歴代二十五朝、長い朝廷でも九百年とは續かず、その時には天の命が革まつたものと覺悟して、平氣で新しい天子を戴いてゐる。かういふ國には、決して大化の改新や明治の維新のやうな改革が行はれる筈はない。イギリスの貴族は、今でも大きな領地をもつて居る。ドイツの國もさうである。日本國民の皇室に對する考は、古今東西全く類例が無いのである。

西洋諸國の帝王も、支那の天子も、國民の間から起つてもしくは權力を以て、もしくは輿望により、遂に帝王の位を贏ち得たのである。素姓を洗ひ、祖先を正せば、同等の國民であ

王侯將相云云  
秦の陳涉の語。

覬覦

大日本史

三百九十七卷。  
神武天皇より後  
小松天皇までの  
歴史。徳川光圀  
の編纂。

源義朝

爲義の子。保元  
の亂に功あり。  
平治元年叛して  
敗死す。(一七八  
三年—一八二〇  
年)

る。これが諸外國民の王室に對する考であらう。

日本人は、皇室をわれわれ國民とは一種別なものと見て居る。支那には、王侯將相寧<sup>イソク</sup>ゾ種アランヤ<sup>イソク</sup>といふ語があるが日本人は、帝王といふ位は國民の決して覬覦すべきものでないと、祖先以來さう考へて居る。長い歴史の中には、皇家に弓を引いた者も無いではないが、天子の位をねらふやうな考は決して無い。

大日本史には、源義朝や源義仲が叛臣傳に入れてあるが、これは、天子に向つて敵對した事の大義名分を正したので、彼等は固より皇室を傾け奉らうとした謀叛人ではない。いづれも、皇室の寵を失つた悔しまぎれに、手向ひした亂暴人

源義仲

治承四年兵を信  
濃に擧げ平氏を  
西海に奔らす。  
元暦元年一月粟  
津に戦死す。(一  
八四年—一八  
四四年)

平將門

相馬小次郎と稱  
す。下總に據り  
て叛し、天慶三  
年誅せらる。(一  
一六〇〇年)

弓削道鏡

河内の人。孝謙  
天皇に仕へて、  
太政大臣禪師と  
なり、遂に法王  
の位を授けら  
る。光仁天皇立  
ち給ふや、下野  
薬師寺別當に貶  
せらる。(一四  
三三年)  
廢—廢

に過ぎぬ。多くは朝廷の或官位を得たいと思ひながら、それが得られぬ爲に、騒動を起して我儘を通さうといふ輩で、叛臣と雖も朝廷の尊さを忘れぬものである。平將門も、檢非違使になれなかつた爲に謀叛したのである。ただ一人、弓削道鏡といふ坊主が、佛法、王法を一つにして、自分がその位に坐らうといふ不屈な料簡を起したが、忠誠な臣民の聲は八幡の神託となつて、忽ちこれを排斥した。その外には一人も無い。

藤原氏が廢立を行つたといつても、自分の女の生んだ皇子を皇位に即かせたいといふ慾望で、これが即ち人間としての最大慾望であつた。その慾望さへ達すれば、

この世をばの歌  
藤原道長の作。

この世をばわが世とぞおもふ望月の

缺けたることもなしとおもへば

といつて大満足したのである。如何なる悪人でも叛人でも、皇室を尊ぶ者は必ず持つて居つたので、外國のやうに折がよければ取つて代らうなどといふ者は毛頭微塵なかつたのである。

開闢

蓋し開闢以來君臣の分が定まつてゐるといふことは歴史上の事實からの説明を待たず、有史以前からわが民族の腦裏に浸みわたつてゐた金言である。(芳賀矢一「國民性十論」)

## 一一 茶碗の茶

渡邊南隱

臨濟宗の名僧  
岐阜縣の人。東京に住す。明治三十七年十一月寂す。(二四九四年—二五六四年)



渡邊南隱

嘗て一人の書生があつて、有名な禪僧の渡邊南隱の草庵を訪うて、教を請うたことがあつた。

一體教を請ふには、それぞれ作法のあることで、むやみやたらに議論をしかけるものではない。處が、この書生、元來南隱をいひ込めて困らせようといふのが目的であるから、大きな聲で、何の彼のと大いに理窟を並べ立てた。

鹽一塩

しかし南隱はそんな事にはとんと構はない。通常の人に對する時と更にかはりはない。まあ茶でも一杯飲むがよいといふ鹽梅で、茶碗に茶を注いで進めた。書生はそれを一口飲むか飲まないで、ますます聲を高めて議論を試みるのであつた。

さうすると、南隱が急須を取つて、そのまだ飲み盡さぬ茶碗の中へ又茶を注がうとした。書生は議論中であつたが、あわてて、

「いやもう澤山です。こぼれます。こぼれます。」

といふと、南隱その聲に應じて間髪を容れず、

「邪心うちに充てり。理も亦入らず。」

といつた。

からかひ

たとひ。

書生は面白半分にからかひにやつて來たのであるから、忽ちその脚下を見透かされた。これは、お前の心に邪曲な考が一杯充ちて居る以上は、たとひどんな高遠な道理を話して聽かせた處が、それは何の益にも立たない、眞實の心でなければ、決して何事でも身に徹するものではない。高遠な道理といふものは、そんな口先ばかりの議論ではない。誠にこれは慎まねばならぬとの謂である。流石の書生も、これには如何にもと恐れ入つて、頭を下げたといふ話である。

(南條文雄「佛教人生觀」)

南條文雄  
文學博士。帝國  
學士院會員。岐  
阜縣大垣に生ま  
る。眞宗大谷派  
の學僧。昭和二  
年九月歿す。(二  
五〇九年―二五  
八七年)



## 二二 茶の花

茶  
山茶科の木。

茶の花が白く咲いた。

茶は華美好きの多い草木のなかにあつて、ひとり隱遁の志の深い出世間者である。

裏庭の塀際か垣根つづきに植ゑられて、自分の天地といつては僅かに方丈の空間に過ぎないことが多いが、唯いたづらに幹を伸ばし枝を擴げるのは、自分の性分に合はないことを知つてゐるこの灌木は、いかにも隱遁者らしい恰好で、まるまると背を圓めて、地べたにかいつくばつてゐる。

春から夏へかけ、多くの草木が太陽の青春と情熱とに飽

白磁

酔しようとして、てんでに大きな底の深い花の盃を高く持ち上げてゐる頃には、彼は心靜かに日向ぼつこをして、微笑を續けてゐるばかりだ。そしてその騒騒しい草木が、花を閉ぢ葉を振ひ落してしまふと、この謙遜な隱遁者はやつと自分の番が來たやうに、厚ぼつたい葉の蔭から小さな盃を持ち出して來る。それは白磁作の古風なもので、彼はそれでもつて、初冬の太陽から水の滴りのやうな孤寒と靜思とを、そつと汲み取るのである。

渡鳥は毎日のやうに、寒空を横切つて思ひ思ひの方角へ飛び往くのが見られるが、みんな自分の旅にかまけてゐて、誰ひとり、途の通りがかりに空地に下りて來て、この隱遁者

鷓鴣



を見舞はうとはしない。ある薄ら寒い日の夕ぐれ前、灰色の著付をした小さな旅人が、ひよつくりと訪ねて来る。長めの尻尾を思ひきり脊に反してゐるので、誰の眼にもすぐに、鷓鴣であることが分らうといふものだ。

鷓鴣は灰色の翼を持つてゐながら、空高く飛ぶことを心がけないで、絶えず物蔭から物蔭へと孤獨を求めてさすらひ歩くひとり者である。このひとり者は寂しい裏庭の茶の木が目につくと、自分の好みにそっくりな好い友だちが見付かつたやうに、いきなり飛んでいつて、厚ぼつたい葉なみを潜りぬけたり、小枝につかまつてとんぼ返りを打つたりする。(薄田泣菫―草木蟲魚)

薄田泣菫  
詩人。名は淳介。  
岡山縣の人。明治十年五月生まる。

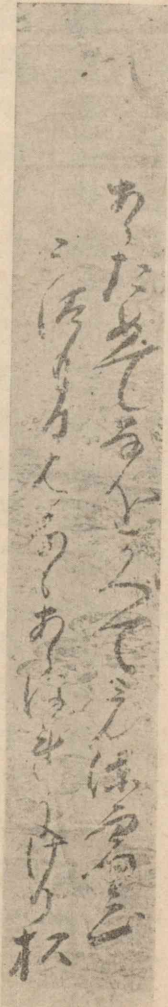
### 一三 豊太閤

洪闊  
襟懷

古人に景仰すべきもの甚だ多し。豊太閤の如きその一人なり。事業の宏壯、施設の警拔、氣宇の洪闊、度量の廣大、千古絶倫といふべし。公の事業施設は後世或は得て學ぶべし。その氣宇、度量に至りては殆ど望むべからず。公の人となりを想ふ毎に、襟懷の爽然たるを覺ゆ。  
わが邦に未曾有なる應仁以來百年の大亂を定め、武威は異域をも震動せしめ、天下懾服して、又一人の頭首を擡げ得るもの無き尊貴の地位にある人として、左の一事あるを想ふ時は、眼のあたりその人を見るが如き心地す。

或時太閤馬に乗りて烏丸通を參内す。遂に下女四五人、赤前垂を掛けたるが、立ち出でて見物す。太閤馬上より見て宣ふ。只今われ内裏にて能をすべし。皆皆見物にこよ。又事を爲すに臨んで、奇警迅速、一點も容體ぶらざるは、左

あらためてな  
をかへてみん  
深雪山うづも  
るはなもあら  
はれにけり  
松



筆吉秀臣豊

の一事にても知らる。

佐久間が云云  
佐久間盛政が中  
川清秀を破りし  
にて、天正十一  
年賤が嶽合戦の  
時なり。

太閤茶の湯を催し居給ふ處に、佐久間が中川を討ちし注進來る。太閤その座より裳をまくり、えいやえいやとて馳せ出で給ふ。御馬廻衆は追ひ追ひに追ひつき奉る。

唐冠



聚樂

京都内野の聚樂  
の第。

伏見

京都伏見にあり  
し桃山の第。

安土

天正四年、信長  
が近江國蒲生郡  
安土村に築ける  
安土城なり。

而して、盛装の行列には唐冠を冠り、鬚を附くるなど、その容體ぶれる有様また面白し。蓋し唐冠を冠るは信長の眞似なり。信長の常になしたる風體なり。その他公の奢は多く信長を手本とせり。聚樂、伏見の宏壯は、安土の結構を眞似たるに始まる。公の失は自家の才略を恃み、古今の治亂を究めずして、戒慎の足らざるにあり。さばれ公は百年の大亂を定め、人民塗炭の苦を救はんが爲に、この世に出現せし偉物として見るべきのみ。

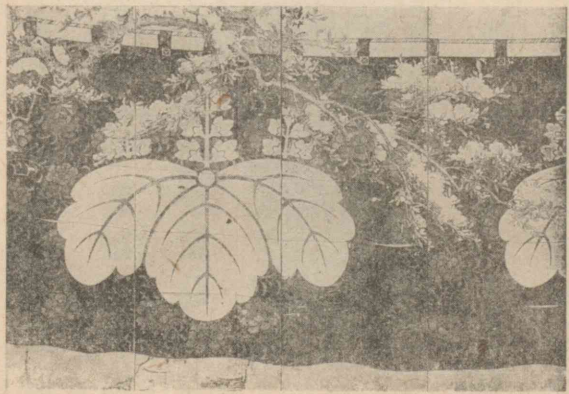
又公の明察にして苛ならざるは、左の一事にて知らる。山城の内山里といふ處を、梅松といふ坊主に預けらる。新に松を植ゑて程もなきに、松茸生じたりとて獻上す。太閤

獻上

笑ひ給ひて「わが威光誠にさもあらんと宣ふ。それより數度獻ず。實は他所より求めて獻じたるなり。太閤左右のものにもはや松茸獻ずることをやめさせよ。生え過ぐるぞ」と宣ふ。

公が大體に敏くして物事に細瑣ならざること左の一事に見ゆ。

太閤の柴田勝家を征する時、城に火の手の上るを見て、そのまま越中に赴き、佐佐陸奥守を征し給ふ。勝家が首は見され

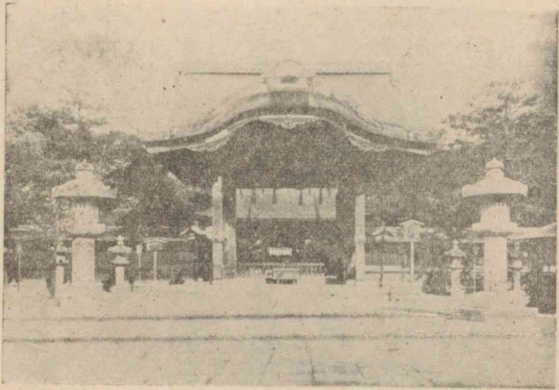


醍醐の花見屏風

柴田勝家  
信長の臣。修理亮と稱す。天正十一年秀吉を除かんとして敗れ、越前北莊に自殺す。(二一九〇年—二二四三年)  
佐佐陸奥守  
名は成政。後秀吉に降り、肥後

に封ぜられしが、天正十六年失政の罪により死を賜はる。(二一九九年—二二四八年)  
氏郷  
蒲生氏。信長の臣。後秀吉に従ふ。文祿四年二月歿す。(二二一六年—二二五五年)

高野山  
和歌山縣伊都郡にあり。頂上に眞言宗の大本山金剛峯寺あり。



豊國神社

ども、さやうの事は何とも思はざるなり。

公の無造作なるは左の如し。

太閤、氏郷を會津百萬石に封じ給ひつ。その後、氏郷の出仕するや、太閤他事を問はずして、汝手を能く書けり。謠本を一番書きてくれよ。硯紙を持ち來れ」と宣ふ。公も儉徳の心なきにあらざること左の如し。

太閤高野山へ參詣の時、割粥をすすめよ」と宣ふ。暫しありて料理人調へ參らす。太閤喜びて、高野山は白無き處なり。

ついで(序)

わが割粥を食はんことを知りて持ち來る。料理人才覺の至なり」と宣ふ。實は俄かに多人數にて俎の上にて刻めるなり。後に話のついでに申し上げければ、大いに怒つて、無くば無しといひて常の粥を出さんに、何の仔細かあらん。わが力には、一粒づつ削りて食ふとも心のままなれども、さやうの奢をばせぬものなり」と怒り給ふ。

公が寛仁なる左の如し。

北條氏直方より、諏訪峠より東八萬石の領地は、氏直が領ならでは協はぬ處なり。こを渡されなば上洛せん」といふ。太閤與へんと宣ふ。諸臣同ぜず。太閤宣ふ、八萬石の地を吝しみ、諸卒を遠國の合戦に勞せんこと不便なり。これを與

北條氏直

氏政の子。後高野山に放たる。

天正十八年歿す。(二二二年

一二二五〇年)

諏訪峠

長野縣諏訪郡。

たうげ(峠)

實著

へて後上洛せずして異變あらば、その時軍を發せん」と。公が無貪著なること左の如し。

太閤伏見在城の時、鐵砲四五十ばかり放つ音す。座にある人皆皆怪しむ。太閤大名ども、鳥など打ちに出でて歸るさに、玉藥を打ち抜くならん」とて冷笑つておはす。見に遣はしければ果して然り。この者ども聞きて、少し氣味あしく思うて、一兩日過ぎて御前に出づ。太閤笑つて宣ふ、「この頃の遊面白かりしか」とて、少しも心に掛け給はぬ體なり。右の諸節は、老人雜話、武功雜記、備前老人物語の諸書より抄出せり。これらは公の時を去ること遠からざる頃の人人の手になりしものなり。(矢野文雄 古人評論)

矢野文雄  
政治家。龍溪と號す。舊豊後佐伯藩士。嘗て特命全權公使として清國に駐劄せり。昭和六年六月歿す。(二五〇年—二五九年)

一四 機智縱横

一、百人一首の對句

荻生徂徠嘗て小倉百人一首を検して、作者の氏名とその歌の第一字とを連結し、大江千里月の句を得たり。依つてこれが對句を求むれども得ず。偶門人服部南郭來る。徂徠語るにこの事を以てす。南郭卒然答へていはく、「春道列樹山とせばいかにと。徂徠手を拍つて妙と叫びぬ。」

荻生徂徠  
深山ノ裏  
服部南郭  
儒者。名は元喬、通稱小右衛門。京都の人。最も詩文に長ず。寶曆九年六月歿す。(二三四三年—二四一九年)

荻生徂徠  
儒者。名は雙松、通稱總右衛門。江戸の人。古文辭學を唱道す。享保十三年正月歿す。(二三二六年—二三八八年)

麟公道ヲ修ム  
深山ノ裏

服部南郭

儒者。名は元喬、通稱小右衛門。京都の人。最も詩文に長ず。寶曆九年六月歿す。(二三四三年—二四一九年)

賴春水

儒者。名は惟寛、通稱彌太郎。安藝の人。藩に仕へて學制に功あり。文化十三年二月歿す。(二四〇六年—二四七六年)

菅茶山

儒者。名は管帥、大冲と稱す。備後の人。郷里に教授す。文政十年八月歿す。(二四〇八年—二四八七年)

われ見ても  
古今集に「われ見ても久しくなりぬ住の江の岸の姫松いく代へぬらむ」。

荷葉風ニ觸レテ露ノ瀉グヲ開ク 春水

二、羽織と袴

賴春水は山陽の父にして、學問を以て世に著はれたり。赤貧洗ふが如く、常に白地の古羽織を著し起居整然たり。友人菅茶山たまたま來り訪ふ。戯れていはく、「われ見ても久しくなりぬ古羽織」と。春水言下に答へていはく、「君の袴は幾代經ぬらんと。まことに茶山の袴も山の摺れたる古袴なり。二人

春水 賴春水は山陽の父にして、學問を以て世に著はれたり。赤貧洗ふが如く、常に白地の古羽織を著し起居整然たり。友人菅茶山たまたま來り訪ふ。戯れていはく、「われ見ても久しくなりぬ古羽織」と。春水言下に答へていはく、「君の袴は幾代經ぬらんと。まことに茶山の袴も山の摺れたる古袴なり。二人

賴春水筆

相見て大いに笑ふ。

三、姨捨山の月

塙檢校保己一  
國學者。武藏の  
人。群書類從六  
百二十五卷を編  
輯す。文政四年  
九月歿す。(二四  
〇六年―二四八  
一年)  
姨捨山  
長野縣更級郡。

塙檢校保己一が學事に關して頗る敏感なりし小話は、世  
のよく傳ふるところなるが、或時旅行して、信濃路に入り、姨  
捨山の下を過ぐ。ここは古來田毎の月を以て聞えたる名所  
なり。人人檢校の詠を見んことを乞ふ。檢校聲に應じていは  
く、

わが心をぐさめかねつ更科や

をばすて山に照る月を見て

と。人人、その古歌なることを訝る。檢校手を振つて、「否否。終の  
『て』文字濁りて讀むべし」といふに、人皆感歎してその頓才に  
服す。

### 一五 森の繪

えん(縁)  
蠅(蠅)



吉村 冬彦

暖かい縁に背を圓くして横になる。小枝の先に散り残つ  
た枯れ枯れの紅葉が目に見えぬ風にふるへ、時に蠅のやう  
な小さい蟲が小春の日光を浴びて、垣  
根の日陰を斜に閃く。眩しくなつた眼  
を室内へ移して鴨居を見ると、ここに  
も初冬の「森の繪」の額が薄ら寒く懸つ  
て居る。

中景の右の方は樫か何かの森で、灰色をした逞ましい大  
きな幹はすくすくと立ち竝んで、次第に暗い奥の方へつづ

コバルト  
紺青

橙

く。隙間もなく茂つた緑は霜に稍寂びて、えもいはれぬ色彩が梢から梢へと柔かに移り變つて居る。コバルトの空には卵色の綿雲が流れて、遠景の廣野のはての丘陵に紫の影を落す。森のはづれから近景へかけて、石ころの多い小路がうねつて出る處を、橙色の服を著た豆大の人が、長い棒を杖にし、前に五六頭の牛羊を追うて、とぼとぼ出て来る。近景には低い灌木が所所茂つて、中には箒のやうな枝に枯葉がくつ附いて居るものもある。あちらこちらに切り倒された大木の下から、眞青な羊齒の鋸葉が覗いてゐる。

むしろ平凡な畫題で、作者もわからぬが、自分はこの繪を見る度に、靜かな田舎の空氣が畫面から流れ出て、森の香は

涌湧

こうぢ。(小路)

はご



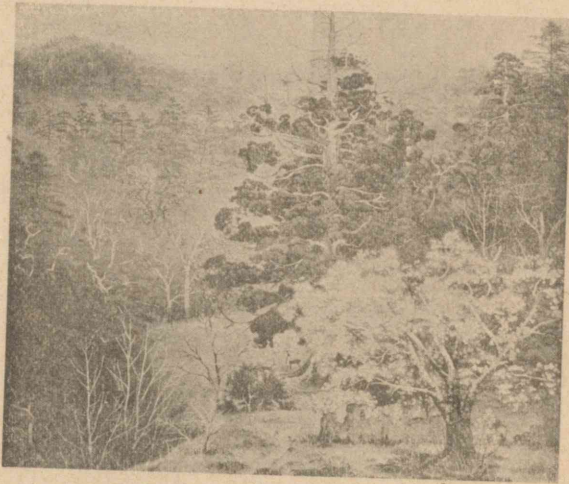
薰り、鴨の叫を聞くやうな氣がする。その外にまだ何だか胸に響くやうな鋭い喜と悲みとの念が涌いて来る。

二十年前の我が家のすぐ鄰は叔父の屋敷、從兄の信さんの宅であつた。裏畠の竹藪の中の小路から、我が家と往來が出来て、垣の向うから熟柿が覗けば、こちらからは烏瓜が笑ふ。藪の中に一本大きな赤椿があつて、鴨の渡る頃は、落ち散る花を笹の枝に貫いて、軍遊びの陣屋を飾つた。木の空には「ご」を仕掛けて鴨を捕つたこともある。

叔父の家は富んでゐて、奥座敷などは二十疊もあつたらう。美しい毛氈が敷いてあつて、欄間に木彫の龍の眼が光つてゐた。いつか信さんの部屋へ遊びに行つた時、見馴れぬ繪



え。(餌)



(筆三宮木高) 森の日の春

の額が懸つて居た。何だ」と聞いたたら、「油繪だ」といつた。その頃田舎では石版刷の油繪は珍しかつたので、西洋畫といへば學校の臨畫帖より外には見たことのない眼に、始めてこれを見た時の愉快な感じは忘れられぬ。晝はやはり田舎の風景で、ゆるやかな流の岸に水車小屋があつて、柳のやうな木の下に、白い頭巾をかぶつた女が、家鴨に餌などやつて居る。何處で買ったか」と聞いたたら、「町の新店に、こんな繪や、もつと大きな美

袖無し



睫  
にじむ

をさなし(幼)

しいのが澤山來て居る」といふ。

家へ歸つて、夕飯の膳についても、繪のことが心をはなれぬ。黄昏に袖無しを羽織つて、母と裏の垣根で寒竹筍を抜きながら、繪のことを思つて居た。薄暗いランプの光で、寒竹の皮を剥きながら、美しい繪を思ひ浮べて、寂しい母の横顔を見て居たら、急に心細いやうな氣が胸に涌いて、睫毛に涙がにじんだ。何故泣くか」と母に聞かれて尙悲しかつた。そんなに欲しければ買つて上げる。男の癖にそんな事では」と諭されて、更にしやくり上げた。母は蟲抑への藥を取り出して吞ませてくれたが、あの時の自分の心は、今でも説明が出来ぬ。幼くて片親の手一つに育つて、あまり豊かでない生活が

園一田

朧げに胸にしみ、浮世の木枯はもう周圍に迫つて居たから、何かの刺戟はすぐに譯の分らぬ悲みを誘つたのだ。

あくる日、錢を貰つてまづ學校へ行つたが、教場でも時時繪のことに心を奪はれ、先生に何か聞かれても、何を聞かれたか分らぬやうなこともあつた。放課のベルを待ちかねて學校を跳び出し、信さんに教はつた新店を尋ねたら、すぐに分つた。店へはひると、一面につるした繪のニスの香に酔うてしまつた。あれも好い。これも氣に入つた。鍛冶屋の煙突から吹き出る眞赤な焰が黒い樹に映えて、遠い森の上に青い月が出て居る繪も欲しかつたが、何となく靜かなこの「森の繪」にきめた。粗末な額縁にはめて貰つて、その上を大事に新

ニス  
塗劑

ほのほ(焰)

額縁

聞で包んで店を出た時は、心臓が高い音を立てて踊つて居た。

歸りに舊城の後を通つた。お城の杉の梢は、丁度この繪と同じやうな寂びた色をして、お濠の石崖の上にも葉をふるうた椋の大木が、枯菰の中の冷たい水に影を落して居た。濠に鄰つた牧牛舎の柵の中には、親牛と仔牛とが四五頭、愉快さうに、からだを横にゆすつて跳ねてゐる。自分も何だか嬉しくなつて、口笛をびゅつびゅつと鳴らしながら、飛ぶやうにして歸つた。

「森の繪」が引き出す記憶には限がない。竪一尺、横一尺五寸の粗末な額縁の中には、あらゆる幼時の美しい幻が疊み込

幻

濠

まれて居て、折にふれては畫面に浮き出る。現世の故郷はうつり變つても、畫の中に映る二十年の昔はさながらに美しい。外の記憶が薄れてくる程、森の繪の記憶は鮮かになつて来る。

他郷に漂浪しても、この繪だけは捨てずに持つて來た。額縁も古ぼけ紙も大分煤けたやうだが、森の繪はいつでも新しい。(吉村冬彦「藪柑子集」)

煤

吉村冬彦

本名寺田寅彦。物理學者。理學博士。東京帝國大學教授。高知市の人。昭和十年十二月歿す。(二五三七年—二五九五年)

敷石に紅葉散りけり門の内

木枯しや匏屑舞ふ普請小屋

冬の月火見櫓にかかりけり

刈株に鶴鴿下りる冬田かな(冬彦)

### 一六 猿の話

遠山郷

長野縣伊那郡

赤石山

長野縣伊那郡

跋扈

この遠山郷は附近に千頭の御料林があり、大澤、兔、聖、光といつた赤石山系の高峯で取りかこまれてゐるために、今日も猶野生の動物群が、晝日中、村里をわがもの顔で跋扈してゐる。それら動物群のなかで、村人にいちばん顔をじみなのは猿である。遠山川原に一聯五十四位の隊をなした群猿が遊びに出て來るのは別に珍しいことではない。そして暑い日盛に精出して耕作した焼畑の黍、粟、稷などの穂を扱いで、それこそ目も當てられない悪戯をしてゆくのである。これがために部落では猿追といふものを近鄰同志で雇ひ入れ

通草



こくは



てこの災難を防衛する工夫をしてゐる。猿追は朝から晩まで「ホーイ、ホイ、ホイ」と聲高に叫んで猿を追ふ。

猿にもそれぞれ生まれた土地による方言があつて、それによつて遠州産であるか、信州産であるか、甲州産であるかが判別出来るといふ。この話を免洞の山人夫から聞いてゐる時、丁度溪向うの崖の上で幾匹もの猿が、通草あしひや、こくはを取りに出てゐて、その叫び聲は溪溪にこだまして響き渡るのであつた。

「チュッやつてゐますぞ、今のを聞きましたか……」と人夫はいふ。

「ありや信州猿と遠州猿とが喧嘩をしてゐるんです。あの

アイエー、アイエーと響くのは「敵軍が来た！危ないぞ」と叫んでゐるのです。遠州側の警戒の聲です。モアー、モアーと叫んでゐますのは、あれは「大丈夫、安心せえ、安心せえ」と、親猿が



群 猿

その仔猿等をなだめてゐるのです。

ここは溪が深いのと御料林で安全地帯だといふことをよく知つてゐて、毎年秋に入ると遠州からも三河、甲州からも猿が群れて落ち合ふのです。秋の豊樂も去り、雪の舞ふ時節

ざわめき

になると、彼等は三、遠の海岸寄りに再び移住するのです。今聞えてゐるあのざわめきは、土地つ子の信州猿が「手めへたち、繩張を荒らすと承知しねえぞ」といふ、つまりは食べものの繩張争をやつてゐるのです。

猿には一隊ごとにサキヤマがゐて、一隊のすべての行動を指揮するのである。群猿の数が殖えると、サキヤマの補助としてソヘサキが出来る。サキヤマは一群の中でその體力と智謀とが最も秀でて、彼の命令一下、全群は前後左右するのである。それだけに彼の任務も亦重大で、遊行するときも餌を漁り求めるときも、彼は小高い梢にあつて、不斷に四圍の状況を偵察しつつ、その警戒を怠らないのである。彼の眼

に危難や怪しいものが一たび映ると、樹上から一聲の叫をあげる。全群猿はその合圖と共に、彼に従つて風の渡るやうに樹間を縫うて何處へか去るのである。その一絲亂れざる制裁と、その敏捷なる行動とは、まことによく訓練されたものである。

若し彼等が他の群猿と争ふと、その戦鬪はサキヤマとサキヤマとの一騎討で、他のすべてはこれを傍觀し、その勝敗を見届けるのである。その戦法はとりどりであるが、相手の眼をねらふのが最も有効であるらしい。體力に自信のある猿は、最初は樹から樹に、地から梢にと逃げ廻り、相手が疲勞したところを、一舉にその虚を突くといふ。勝負が二時間三

時間に互るのは珍しくない。力全く盡きて一方のサキヤマが逃げ、或は斃れる。ここで兩群はさつと別れてしまふのであるが、敗れたサキヤマの悲惨なことには、この時から生涯群猿に加はることが出来ないのである。そして孤猿として彼は昨日までのサキヤマの威力を失ひ、ここに寂しき漂浪を續けるのである。サキヤマを失つた群猿は、サキヤマの敗れた瞬間から、ソヘサキがこれに代るのであるが、往往このとき同群の間で同士討が行はれる。未だその威信の薄いソヘサキを斃して新たななるサキヤマの株を奪はうとするには、この時以外には決してその時がない。言はば千載の一遇に等しき時機なのであるから。

獵師などがたまたま谷陰や岩の窪みに見かける孤猿はこのサキヤマの落ちぶれで、その多くが片目とか鼻缺などの不具かたはものである。サキヤマが敗れて一たび群猿から離れると、彼は全く生活力を失つてしまひ、その侘わしさに耐へかねて自ら餓死するものもあるらしい。幼猿は知らぬこと、老猿は他の群に新しく加はることは絶対にないといふ。

孤猿の多くは牡猿であるが、たまに牝の孤猿もあるのである。母猿がわが仔いとしさから、時に他の幼猿の口にある餌を奪ひ取り、それをわが仔に與へようとする。それを群中の誰かが見つけたら最後、彼女も亦その群猿から追放を喰ふのである。勿論その仔と雖も同伴することは許されない

のである。檻の中に幽閉された猿なら知らぬこと、野生猿の仲間同士の制裁は極めて嚴格なものである。

われわれは今少しこの山の鄰人の生活を見て行かう。彼等は秋の陽を浴びながら、つねに遠山川原に出て團欒してゐるのであるが、ここで捕つた川魚を鷹にさらはれて、その復讐に最も巧智な場面を見せたことがある。一匹が川原の岩に横臥して死を装ひ鷹をおびき誘ふ。一群中の他のものは岸の樹林中に身をひそめて合圖を待ち受けてゐる。鷹といへども亦さるものである。容易に近づくことはしないが、岩の上の猿の餘りに長い時間の横臥に誘はれて、つひに寄つて見る。尻を啄いて見る。手答はない。再び舞ひおりて頭の

方に廻つてみる。そして最後に眼をねらつて一撃を加へようとするその瞬間、かの猿は一聲高く叫んで猛然と組みつき、遂に他のものの協力に依つて鷹は斃されたのであつた。また彼等は夏の日盛によく水浴に出て来るが、一群の猿が川瀬につかり戯れてゐる中で、高く樹上に見張る一匹は彼等の安危の全責任を負うてゐるサキヤマである。母猿がその背に幼児を負うてゐるもの、川魚を與へてゐるもの、その團欒はまことに美しい情景である。

遠山の郷をたづねる旅人にとつて、猿こそはまことに親愛なる山の鄰人である。(長尾宏也—山郷風物誌)

長尾宏也  
長野縣霧が峯の  
山小屋の主。文  
藝家。

### 一七 無類の的

白河  
今の福島縣西白河郡白河町。

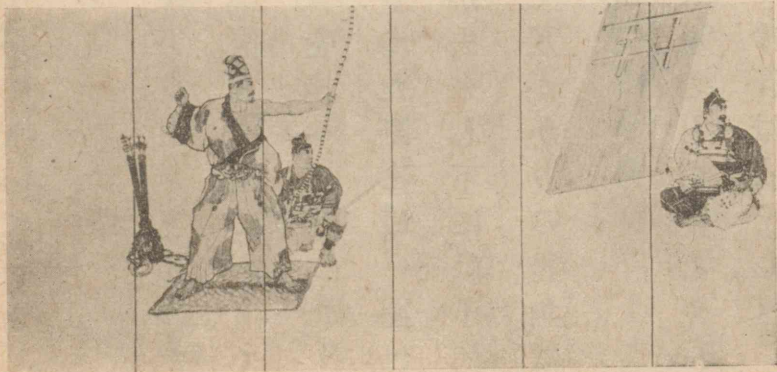
鳥飼藏人  
假作の人物。

奥州の白河に、鳥飼藏人といふ射術の名人があつた。或日諸國行脚の老僧が訪ねて来て、御主人に御目にかかりたいといつた。藏人はすぐに逢つた。老僧は慇懃に挨拶して、

「拙僧は御高名を慕つて遠國から参つたもので御座る。近頃ぶしつけなる御願ながら、生涯の思出に、貴殿の御射術を拜見させて戴きたい」と頼み入れた。藏人は快く承諾し、老僧を誘つて弓場に立つた。藏人の顔には誇の色が見えた。

「では拙い藝を御覽下さい」といつて、弓を取つて矢を番へた。同時に茶碗になみなみと水をついで左の臂に載せた。第

一矢を放つた、と見る中に二の矢が  
繼ぎ、三の矢が繼ぎ、四の矢、五の矢、六  
の矢、七の矢が繼いだ。前の矢の筈に  
後の矢の鏃が相接して、數本の矢が  
只もう一本のやうである。そしてこ  
の瞬く隙もなき働の中に在つて、藏  
人の身體は造り据ゑた石像のやう  
に泰然として、臂の上の茶碗にはさ  
ざ波だに立たなかつた。一一の矢が  
的の正鵠を射たことはいふまでも  
なら。



（筆 耕 廣 尾 西） 勢 弓



老僧は感歎して「ああ」といつたが、やがて呟いて「しかしまだ弓射の弓だ。神に入つた技ではない」といつた。

藏人は聞き咎めて「御僧、何と仰しやりました」と尋ねた。老僧は「いや言葉で御答は出来ませぬ。拙僧と一緒に御出で下さい」といつて先に立つた。藏人は弓矢を携へて従つた。

二人は遂に高い山の絶壁に攀ち登つた。断崖は一面に苔蒸して、上には矛形の峯の面を白雲が去來し、下には千仞の淵が泡を立て渦を巻いてゐる。そして足がかりの岩角は辛うじて爪先を託するに足るだけである。

老僧は先に立つて悠然として藏人をさし招いた。見れば藏人は色が青ざめ足がふるひ、そして冷汗は衣をしぼつて

踵まで濕してゐる。老僧はいつた。

「足がかりはこの通りの大磐石で、向うには松が枝に鳶がとまつてゐて、無類の的で御座る。さ、御弓勢を御示し下さい。」  
藏人は答へなかつた。老僧は言葉をついだ。

「藝に至つた者は我を去り天地に同じて、どのやうな高い山深い淵に臨まうとも、神氣の變るものではない。然るに御事は、前には誇る色があり、そして今はおどおどして居られるではないか。まだ一御奮發を要ませうぞ。」

藏人は我慢の夢を覺まして、再び懸命の修行をした。そして驕ることなく恐るることなき至上の達人となつた。

(五十嵐カ―我が三大國民道)

### 一八 格言五則

人を知る者は智、自ら知る者は明、人に勝つ者は力有り、自ら勝つ者は強し。(老子)

鷓鴣深林に巢くへども一枝に過ぎず、偃鼠河に飲めども満腹に過ぎず。(莊子)

道は邇しと雖も行かざれば至らず、事は小なりと雖も爲さざれば成らず。(荀子)

心は小ならんを欲し、志は大ならんを欲し、智は圓ならんを欲し、行は方ならんを欲す。(文中子)

山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し。(王陽明)

雖一鼠

王陽明

明の大儒。名は守仁。良知の説を立てて一世の師表たり。(西暦一四七二年—一五二九年)

### 一九 紋章



沼田頼輔

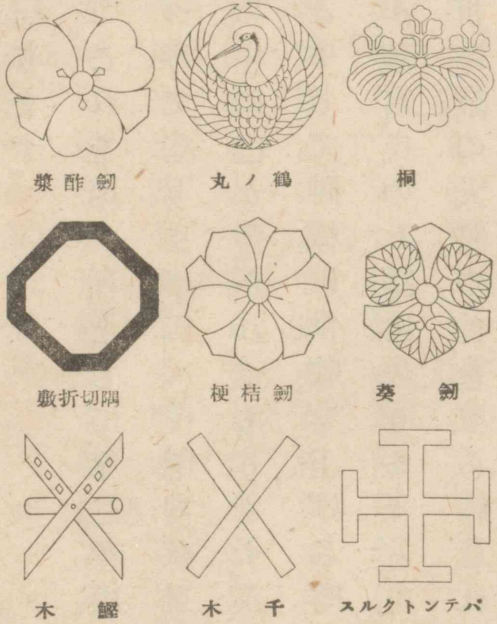
我が國では、家があれば苗字があります。そして苗字があれば必ず紋所があり、近頃は白襟黒紋附とも申す位で、禮服には必ず紋所を付けることになつて居りますが、さてその紋所に關する知識はといふと、由來は勿論、名前すら知られてゐないことが澤山あります。私は常にこれを遺憾として居りましたが、先年山内侯爵家の家史編纂を依頼されて居りました頃、同家では桐の替紋を用ゐて居られることについて、理解しかねて困つ

山内侯爵家  
舊高知藩主

たことがありました。又その後、歐洲大戦争の終らうとする時分に、大阪朝日新聞社から、ベルギー國王に鶴丸の紋の附いた太刀を献上する企があり、同社の海外特派員がその紋所の由來につき邦人に尋ねたが解らなかつたため、英國の紋章學者に尋ねて、御下問の折の参考にしたといふことを聞き及んで、甚だ遺憾に思つたことがありました。さやうなことが動機となつて、私は紋所の研究に没頭することになりましたが、その取調に基き、我が國の紋章がどういふ意味で用ゐられたかといふことについて、極めて大體の話をして見たいと思ふのであります。

我が國の紋章といふものは、本來武家時代に或標章を旗

や幕の目印として使つたのに始まつたもので、その結果武張つた意味を含んだ紋章が非常に多いのであります。例へ



ば劔酢漿草、劔葵、劔桔梗などいつて、劔を花の間に取り合はせて居るのがそれで、そのみならず、兜の鍬形や總角や脛楯や、その他弓矢は勿論、武器に關するものは、悉

く紋所に用ゐられて居るといつてもよいのであります。但かういふ武張つた紋所はおほく武家に用ゐられたので、お

公卿衆には、かやうな紋所を用ゐて居るのは少しもありません。それゆゑ私は、この種類の紋所を、尙武的紋章と申して居ります。

これを第一種として、第二種は戦争の際の功名手柄を後づけて居ります。例へば徳富蘇峯氏の紋所を見ますと、八角の中に巴が畫かれてあります。八角といふのは、隅切の折敷と申して、神様に供物を上げる時に用ゐるものであります。が、徳富氏のお話に依りますと、氏の先祖の方が島原の亂の折に敵の大將の首を取られ、これを首實檢に供する爲に、隅切折敷に載せて大將の見參に備へられた、それに因んでこの紋所を作られたといふことで、巴は昔から、一つの頭、二つ

徳富蘇峯

名は猪一郎。熊本縣の人。貴族院員。帝國學士院會員。文久三年正月生まる。

島原の亂

寛永十四五年。天主教徒の亂。

關が原の合戦

慶長五年九月。徳川家康と石田三成との戦。

平塚爲廣

豊臣秀吉の臣。因幡守と稱す。十二二六〇年。

屋島の戦

壽永四年二月。

那須與一

名は宗高。下野の人。

の頭などと呼んだものですから、これを敵將の首に擬へ、折敷に載せて、新しい紋所を組み立てたといふことは、いかにも武家に相應しい話であります。かういふ種類の紋所は澤山あつて、例へば關が原の合戦に、土佐の檻井といふ士が、平塚爲廣といふ大將の首を取つた記念に、生首を紋にしたなどいふこともありました。源平屋島の戦に那須與一が、平家の扇を射落した、その晴れやかな功名を偲ぶ爲に、その子孫の中には、日の丸の扇を紋所に用ゐて居るものがあるといふことであります。

第三種は、私が指示的紋章と名づけて居るもので、概して苗字に因んだものであります。例へば吉野といふ苗字の者

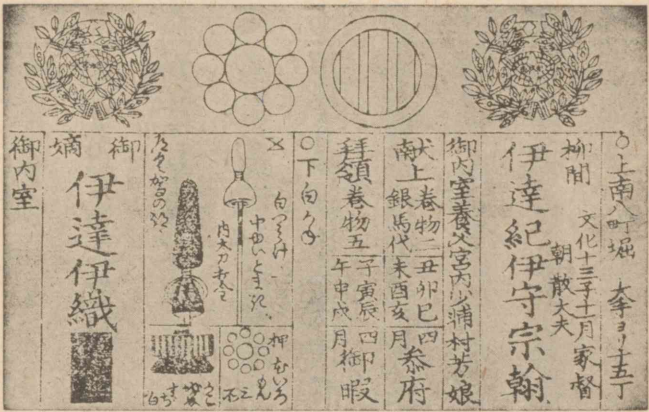
が、櫻の花を紋所にし、堀井、酒井、駒井、井伊、澤井などいふ井の字の附く苗字の者が、井の字或は井桁、井筒などを用ゐる類で、これ等は、その紋所を見て、これが何家の紋所かといふことが、すぐに指示されるやうに作られたものであります。近藤、遠藤、伊藤、佐藤、加藤、工藤、内藤といふ苗字の家が、比較的多く藤の紋所を用ゐて居るのも、この種類に屬します。藤の紋所については、藤原氏から出た家を用ゐるといふやうな説もあり、ますが、全くの誤で、それは雲上明覽といふ書物に據ると、藤原氏から出た公卿が、總計九十七軒あつて、その中藤の紋を用ゐて居るものが、僅か七家だけしかないのを見てもわかります。

## 龍膽

第四種は尙美的紋章といふので、これは多くお公卿さんの家に用ゐられました。お公卿さんには、家家によつて、衣裳や車などの裝飾に代代極つて用ゐられた文様がありましたが、それを紋所にしたのがこれです。例へば、花山院家の杜若、或は今出川家の楓、久我家の龍膽の如きは、いづれも車や著物の文様として用ゐられたものが、後世紋所が行はれるやうになつてから、その方面に轉用されたものであります。これ等の紋所は、もと單に美しいといふ好みによつて用ゐ始められたものでありますから、尙美的紋章といふべきで、それは概して文様から移つて來たものであります。

第五種は信仰の意味から用ゐられた物、即ち信仰的紋章

ともいふべきもので、これには随分澤山の種類があります。例へば、戦國時代にはキリスト教が盛に行はれたので、この教を信ずるものは多く十字架を紋所と致しました。その一例を挙げると、有名な賤が嶽の勇將中川清秀は、當時の名高いキリスト教信者でありましたから、その子孫は今でも「中川クルス」と稱して、バテ



中川清秀  
攝津の人。瀨兵衛と稱す。天正十一年賤が嶽に戦死す。(一、二、四三年)

ントクルスといふものを用ゐて居ります。備前の岡山、因幡

アンドルユーの十字架  
十二使徒の一人アンドルユーが釘殺せられしといふ十字架の型。x型の十字。

の鳥取、この兩池田侯爵家は祇園守といふ紋所を用ゐて居りますが、これはキリスト教の「アンドルユー」の十字架から出たものであります。御承知の如く、島原の亂以來、キリスト教は厳しい國禁となつて、これを信ずる者は大名でも士でも、或は死刑に處せられ、或は家祿を召し上げられるといふやうなことになつて、この教に關係のある者は、片端からその影を潜めました。それが、それにもかかはらず、戦國時代にキリスト教を信じた大名の子孫は、大抵この紋を用ゐて居りました。

信仰的紋章のうちで、神様に關係のあるものは比較的、澤山あります。例へば、鳥居、瑞籬、欄干、御幣、額、瓶子、千木、堅魚木



瓶子

など、苟も神社に關係のあるものは悉く紋所となつて居りますが、これを見てもさすがに我が日本は神の國であると思はれます。

とにかく我が國では、家家に定まつた紋章があつて、それに歴史的、精神的の重大なる意義があるのでありますから、紋所の研究がその方面に關係のある學問に取つて大切であるばかりでなく、これについて一通りの知識と趣味とを持つことは、教養ある國民の一種の嗜みともいふべきであります。 (沼田賴輔「日本紋章學」)

嗜

沼田賴輔

神奈川縣の人。  
紋章學者。文學  
博士。昭和九年  
十一月歿す。(二  
五二七年—二五  
九四年)

## 二〇 日章旗

表徴  
祝祭日に我等が戸毎に翻す日章旗は、實にわが大日本帝國の表徴であります。日本といふものを外國の人の目に見せることも、又外國へ持つて行くことも出来ませんから、日本の大使や公使や領事などの平和の使が外國に居る印にこれを掲げ、又日本が他國と戦ふ時にも、これを掲げて日本の印とします。

複雜  
他國の旗は、色色の彩色の複雜な形になつてゐますが、日章旗は、赤と白とのただ二色であります。白は清淨潔白の印で、又平和の心持を示します。日本國民は常に平和を愛する

一所懸命

ことがこの旗の全面に顯れてゐます。又赤は誠意熱心の印であります。何事にも一所懸命になり、事ある時は奮然起つてこれに従ひ、戦時には死を鴻毛の輕きに比して君國の爲に盡す印であります。けれども、このやうな精神は事變の際に顯すべきでありますから、平時は平和の白で包んでおきます。

形から申せば、日の丸は太陽を示すものであります。わが日本は、昔から「日出づる國」と申しましたが、今日の開けた地理の學問の上からでも、世界のどの國よりも一番先に太陽の光を受ける國であります。日の丸はこれを示してゐます。又わが國民の最も尊崇し奉る天照大神は、天を照らす大神

日出づる國  
推古天皇の朝、  
隋に贈られし國  
書に、「日ノ出づ  
ル處ノ天子、書  
ヲ日ノ没ル處ノ  
天子ニ致ス、慈  
ナキヤ」。

くはし(精)

でいらせられます。これを國旗にうつし奉つて尊崇するのであります。

尙精しく申しますと、日章旗は少しの角もなく圓滿であり、完全無缺の印でありまして、わが天皇の寛仁大度、よく萬物を包んで一丸となし給ふことを示してゐます。苟も日本の民であつたら、悉くこの中に包まれて、永久にわが天皇の一視同仁の恵に浴するのであります。

日章旗はこのやうに大切なものでありますから、國民は祝祭日には必ずこれを掲げなければなりません。その時は常に前申し上げたやうな事を想つて、大切に扱ひ、決して裝飾物などと思つてはなりません。

掲  
裝飾



たふとい  
(尊い)

松波仁一郎  
法學博士。帝國  
學士院會員。岸  
和田市の人。明  
治元年一月生ま  
る。

外國でもその國民は國旗を非常に尊重してこれを拜し、公の場所でこれに禮を怠ることはありません。又學校で授業を始める先に、國旗を禮拜する國もあります。まして日章旗のやうなあり難い尊い國旗を有つてゐるわが國に於いては、大人から子供まで、何人も十分にこれを尊重しなければなりません。(松波仁一郎「日本の誇」)

世界地圖に見る日本の小ささよ。私は嘗て歌つた――

日輪は見る目に小なれど、光世界を照らす。

日本は地圖に小なれど、志四海をいづく。

世界の何處に日を旗章にする國があるか。自ら日本と名告つた時に、みづから日を旗章と定めた日に、日本の位置と天職とは疾くに定まつてゐた。(徳富健次郎)

## 二二 胡 頹 子

父  
名は正濟とい  
ふ。

戸部  
上總久留申の藩  
主土屋民部少輔  
利直。戸部は民  
部省の唐名。



石 白 井 新

我が父致仕の後事に觸れて宣ひたりしには、

「蘆澤といひけるものは、をさなき時に父におくれしを、そ

の父の遺領賜うて、近く召し仕は

れ、それより二十歳ばかりに及び

ぬるところに、戸部の我を召さる

る事ありて参りたるに、戸部は物

に腰かけて、打刀を横たへておは

します。その氣色、常にかはりぬと見えけり。近く参れ」とあり

ければ、腰刀を置きて参らんとするに、「そのままにて参れ」と

ありければ、よりて近く參る。ただ今蘆澤を召し出して、手づから誅すべし。それにさぶらふべし」と宣ひ出でらる。

答へ申す事もなくてあるに、ややありて、「いらへ申す事もなきは、思ふ所やある」と仰せらるるほどに、「さん候ふ。彼がつねづね申し候ひしは、いとけなき時に父におくれし身の、莫大の主恩によりてかくまでに生長せり。この恩に報いませんとせんこと、世の常の人人の如くしては叶ふべからずと申す。天性不敵なるもの、しかも年なほ若くして、をこの振舞も多く候へば、いかなる奇怪をか仕出して候ひぬらん。但若く候ふ時に、彼等が如くなるものにあらずしては、年たけ候はん後に、ものの用には立たぬもの多く候ふか。これらの事

をこ

を存じめぐらし候ふにつきて、御答の遅く候ひぬるは、恐れ思ふ所に候ふ」と申す。

又宣ひ出すこともなく、我もまた申すこともなくしてさぶらふ程に、ややありて、面に蚊の集まりぬるに、「逐ふべし」とのたまふ。顔を動かさしければ、血に飽きて、胡頹子の如くになる蚊の、六つ七つはらはらと地に墜ちたるを、懷の紙を取り出して、つつみて袖にしてさぶらふ。

又ややありて、「罷り歸りて休み候へ」と宣ひければ退出せり。

彼の男は常に酒をこのみて、酔ひみだれぬる事どもありしかば、關といひける人の、それに親しかりしをかたらひて、

二人してまづ酒を斷たしめて、常に諫むる事どもおこたらざりき。かくて年月経てのちに、遂にその父の職をも仰せ蒙りたりき。

今は戸部もうせ給ひぬれど、はじめ、我が申ししことばの空しからざるやうに仕へ參らせよと思ふなり」と宣ひたりき。  
〔新井白石―折たく柴の記〕

わが父は、天性喜怒の色あらはれ見え給はず。笑ひ給ふにも、聲高く笑ひ給ひしことは覺えず。まして、人を叱り給ふには、荒荒しきこと宣ひしこと聞かず。物宣ふことも、如何にも言葉少くして、たちゝる輕輕しからず。驚き給ひ、騒ぎ給ひ、事に堪へ兼ね給ひしなどいふことは見しことあらず。  
〔新井白石〕

新井白石  
徳川幕府の儒臣。名は君美、通稱勘解由。六代將軍家宣に仕へて輔翼の功多し。後致仕して著述につとむ。歴史に精し。享保十年五月卒す。  
(二三二七年―二三八五年)

この事件  
江戸幕府の末に和歌山縣有田郡廣村に起りし津浪。  
衛一衛

おぢいさん

たてかへ。  
(立替)

### 二三 五兵衛大明神 その一



小泉八雲

この事件の起つた頃、五兵衛はかなりの老人であつた。その家は村でも物持であつた上、長い間村の庄屋を勤めたので、五兵衛は村の人人から尊敬されてゐた。村の人たちはいつも五兵衛を「濱口のおぢいさん」と呼んだが、村第一の金持なので「濱口の大盡」ともいつてゐた。五兵衛はいつも小作人や貧乏漁師の爲になることばかりしてゐた。喧嘩の仲裁から、困つた時の金の立替時には貧乏人には只同様にお米を賣つてやつたりした。

まぐる(抉)

五兵衛の大きな草葺の家は、一つの灣を見おろした小さい高臺の上に建ててあつた。この高臺は、小さい段段の水田が濱の方へと竝んでゐて、三方は山に取り巻かれてゐた。この土地は、海に向つて、その山の腹から濱邊までまぐり取つたやうになつてゐて、五兵衛の家は、その中程の高臺にあつた。海の方から見ると、細い白いうねうね道が、段段の田を左右にわけて、下の村から五兵衛の家へと登つてゐた。そして下の村には、灣に沿うて九十ばかりの草葺の家と一つの神社とが竝んでゐた。

それは秋のある夕方の事であつた。五兵衛は下の村の祭の用意を、自分の家の縁側から眺めてゐた。その年は非常に

減減

稲の出来が好かつたので、氏神で盛な豊年祭が行はれることになつた。老人は村の屋根の上にひるがへつてゐる大幟や、竹の竿についた祭提灯や、神社の森蔭に見える飾り行燈や、派手を揃ひを著た若い人たちの群を見ることが出来た。その時、老人と一緒にゐたのは、小さい十歳の孫だけであつた。他の者は早くから村の方へ下りて行つたが、少し加減の悪かつた五兵衛老人は、孫と寂しく留守居をしてゐたのであつた。

その日は、秋だといふのに、何となしに蒸し暑かつた。そして夕方になると、そよ風が出たが、それでも何だか重くるしい暑さが残つてゐた。そんな日には、とかく地震があるもの

だつたが、この日も間もなく地震が來た。その地震は別に驚くほどのものではなかつた。しかし、これまで幾十回となく地震を経験してゐる五兵衛老人には、變に思はれた。長いもの、ゆつたりとした揺れやうであつた。多分極めて遠い土地の大地震の餘波であるらしかつた。家はきしみながら幾度か穩かに揺れて、また元の靜けさに返つた。地震が終ると、老人の鋭い考へ深い眼は、氣遣はしさうに下の村を見た。丁度何ともわからない所で、何となしに少し變だといふ感じに、思はずある一方に氣が取られるやうに、老人には沖合の方にでも常ならぬ事があるやうに思はれたのであつた。老人は立ち上つて海を眺めた。海は不意に暗くなつて、何だか

おき(沖)

風と反對に波が動いてゐるやうだつた。波は沖へ沖へと走つてゐた。

付附

忽ちの中に、下の村でも、この妙な出來事に氣が付いた。先の地震を感じた人は一人もなかつたが、この海の動きには皆が確かに驚いた。老人の眼にも、村の大勢が浪際へと走るのが見えた。誰もが曾て知らぬほど、海水が引きはじめた。これまで知らなかつた、肋骨のやうな畦のある砂の廣場や、海草のからんでゐる大きい岩底が見てゐる間にあらはれて來たが、村の人人は、この意外な引潮が、何を意味するかは知らないやうだつた。五兵衛自身も、こんな有様を見たのは初めてだつた。しかし、幼い時に、父が話したことが胸に浮んで

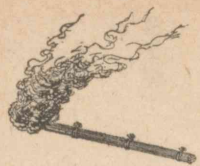
しほ(潮、汐)

をさない(幼い)

咄嗟

くる(聲)

松火



來た。何百年の前にあつたといふ傳説でも、彼は知つてゐるのであつた。彼には海がどうなるかが解つた。多分この時、五兵衛老人の咄嗟に考へたことは、下の村へ孫を遣るにかかゝる時間の事であつたらう。山のお寺の僧に、大釣鐘を鳴らし、て貰ふまでに要る時間の事であつたらう。しかし、それは彼が大切とする時間よりは長くかかるのだつた。老人は孫に向つて大聲で命じた。

「おい忠、早く、大急ぎだ。松火をつけて來い。」

松火は嵐の晩に使ふために、海岸の村村ではどの家にもあつた。子供はすぐに持つて來た。すると老人はそれを擱んで、家から少し下つた田に急いだ。そこには濱口一家の一年

むくい(酬)

うづ(渦)

の勞役の酬として、熟しきつた稻の刈束が堆く積んであつた。老人はその近いものに火をかけた。日に乾いた藁は、吹きあげる海風にどつと燃えあがつた。老人は走つて、第二の稻の山に火をつけた。第三の山につけた。一山、一山、忽ちに天に冲する大きな煙の渦が、幾條も幾條も合して空に高く渦巻いた。孫の忠は青くなつて、

「お祖父さん、お祖父さん、どうして、どうしたの」と叫んだが、五兵衛老人は答へようともしなかつた。彼はただ命の瀬戸にある下の村の四百人の事ばかり考へてゐたのだつた。忠は突然泣きだして、家の方へ駆けこんだ。その祖父が氣が狂つたのだと思つたのである。

老人は自分の家の最後の稻むらに火をつけると、その松火を投げ出した。この炎に山寺から鐘が鳴り始めた。村の人は、この鐘の響に、この煙の渦巻に、濱邊から村を過ぎて、丘へ丘へと蟻の群のやうに登つて來た。

一一三 五兵衛大明神 その二

しわ(皺)  
ゆふばえ(夕映)  
(夕映)

日は沈みかかつてゐた。灣の皺のある海底や、斑らに土色のある大きい砂原の廣がりを最後の夕映がぼんやりと照らした。波はまだ沖へ沖へと走つてゐた。

實際は老人の思つたほど長くたたない中に、火消しのための一隊が高臺に著いた。その二十人ばかりの村人はすぐ

稻むらの火を消しにかからうとしたが、老人は手を舉げて止めた。

「うつちやつて置け。燃して置け。大變だ。村中皆ここへ來るのだ。」

村中の人人が追追と集まつた。若い男達や子供が來た。元氣な女達や娘などが來た。それから老人の大方も來た。しまひには上からの合圖に、子供を負つた母親達が來たが、次第に集まつた人人は、やはり何事か知らずに、只燃えてゐる稻と老人の顔とを不思議さうに眺めてゐた。日は沈んだ。

「お祖父さんが氣が違つたんだ。お祖父さんが火を附けたんだ。」

しまひ。

と孫の忠はすすり泣きしながらいつた。

「火を附けたのはおれだ。だが村ぢや、皆来たか。」

老人が嚴然といつた。村の組合のおもだつた者や、家の主人達は、人人の顔を見廻したり、阪を上つて来るものを數へたりした。

「はい。皆おます、でなくても直ぐに参ります。一體どうしたのですか。」

「来た。見ろ。」

老人は沖の方を指さして、力一杯の聲で叫んだ。

「来た。どうだ。おれは氣ちがひか。見ろ。」

黄昏の薄明りをすかして、一同は東の方を見た。そして薄

黄昏

聳えて

暗い地平線の端に、まるで海岸のやうな細い長い一線を見た。それは見てゐる中に太くなつた。線は廣くなつた。忽ちその長い暗がりには、堤のやうに、そして絶壁のやうに聳えて、鳥の飛ぶよりも早く進んで来る。押しかへしの浪だつたのである。

「津浪！」と人人は叫んだ。海がおそろしく盛り上つて、山山を轟かすほどの重さで、電を劈いたやうな泡沫と共に海岸にぶつかつた時、何ともいへぬ、重い、強い、すべての叫聲を打ち消すところの響がした。一時は、雲のやうに阪の上へ突進して来る水煙のあらしの外には何も見えなかつた。人人はうろたへながら、唯おびえた。そして再び見直した時、人人は

劈

なほす（直）



臟腑

その家家の上を荒れ狂つて走る白い恐しい海を見た。その海はうなりながら、土地の五臟六腑を引きちぎつて退いた。二度、三度、五度、海は進んでは退き、又進んだ。しかし、その度毎に波は小さくなつて、だんだん元の海へと歸つて行つた。大風のあとのやうに荒れながら。

高臺の上には、暫く何の聲もなかつた。一同は下の村の荒廢を無言の中に見つめてゐた。投げ出された岩や、裂けて骨の出た絶壁の物すごさ。家や社のさらはれた迹には、海底からもぎ取られた海藻や砂利がはふり出されてあるむごたらしさ。村は無い。田畑の大部分も無い。濱には家が一つも無い。見えるのは、唯沖の方に物狂はしく浮き沈みする藁家根

迹跡

の二つ三つだけである。死を遁れた恐しさと、家と財とを奪はれた悲しさとに、人人は唯茫然とするばかりであつた。

老人が再びいつた。

「稻に火をつけた譯はあれだ。」

人人は自分の命の救はれた理由に氣がついた。思はず地面に土下座して、五兵衛の前で涙にむせん。

老人も泣いた。一つには、一村の人人の生命を救ひ得たその喜から、又一つには、かう人人が心から感謝してくれるその嬉しさからであつた。

そしていつた。老人は孫の忠の頭を撫でながら

「お前方の這入る家は、まだ残つてゐる。第一、おれの家は村

の衆の家だ。あの山の上にはお寺もある。皆の衆しつかりしろ。」

この威勢の好い言葉に勵まされた人人は、今まで萎れ切つてゐた氣持から立ち返つて、勇ましく叫んだり、鬨の聲を擧げたりした。

それから村の困難は随分續いた。然し村は追追に恢復した。それには老人の努力も大きかつた。

村が再び建て直された時、人人は五兵衛に對する自分等の負債を忘れなかつたが、その偉大な慈悲の魂に對しては何とも酬いることが出来なかつた。彼等は五兵衛の魂は全く神の如きものであると思つた。そこでその御魂の爲に、一

負債

たましひ(魂)

つの社を建てて、鳥居の上には「五兵衛大明神」といふ金字の額を懸けた。村中は少しもその尊さを疑ふことなく、この神の前に祈と供物とを捧げた。

それに就いて老人はどう感じたか、それは私は知らない。唯私の知つてゐるのは、下の村で彼が神として祀られてゐる時、彼は山の上の古い草葺屋根の中で、子供や孫達と一緒に、前の通り人間らしく質素に住んでゐたことである。もう彼が死んでから、百年以上になるが、神社はやはり存在してゐて、村人の祈はこの善良な老人の御魂に向つて、今も捧げられてゐるといふことである。(小泉八雲「生神」)

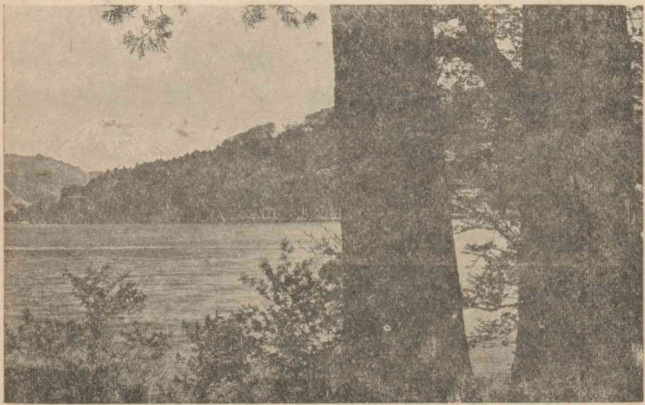
小泉八雲

英國人ラフカヂ  
オ・ヘルンが我が  
國に歸化して  
の名。東京帝國  
大學講師。明治  
三十七年歿す。  
(二五〇年—  
二五六四年)

### 二四 箱根より

起きてみるとまだ雪が降つて居た。呆れたものだ。それでも流石に小降りにはなつてゐた。皆皆飽いてしまつたので、どうでも見物に出懸けようといひ出し、船を仕立てて蘆の湖を越して、第一に姥子へ行つた。

姥子は山姥が金時を育てて居た處だといつてゐる。湯屋がた



蘆の湖

蘆の湖  
神奈川県足柄下  
 郡箱根山中にあ  
 り。

姥子  
同上。

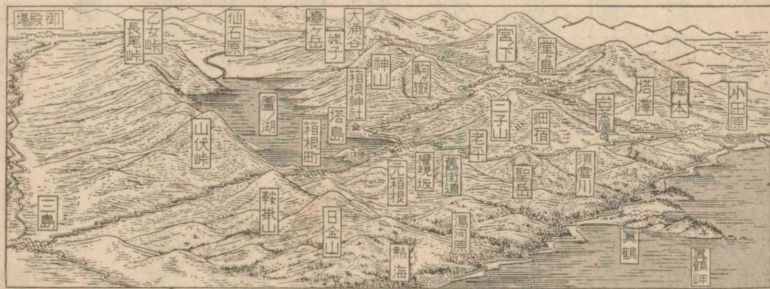
大涌谷  
同上。

馬酔木



だ一軒あるだけだ。その湯も近年は細くなりぬるくなつて來たさうだ。湯に入つてゐながら、いかな金時でもこんな時にや裸ぢや來て居れなかつたらうといつて笑つた。

そこから大涌谷へ行つた。傾斜のゆるい山路つづきだ。雪の中にある杉の林がびつくりするやうな美しい緑をしてゐた。馬酔木が——君は知らないだらうが、百日紅のやうな赤い幹をした。そして白い小さい鈴を連ねたやうな



花の咲く木が、林をなして居た。さうした處で見ると、雪が有り難い程美しく、踏むには勿體なかつた。

大涌谷はやや離れて見ただけであつたが、煮え返る硫黄の煙が、雪で眞白な谷から噴き上げて、雪の上に靡いて居た。珍しいといふだけで面白いは思はなかつた。歸りは又同じ船だつた。

一しきり雪がやんで、眞白に光つてゐる乙女峠、美しく寂しい二子山などが望まれたが、又雪になつて何も見えなくなつてしまつた。ぼうつと白い湖水の上に浮んでゐる船の中に、單調な懶げな艚の音を聞いてゐると、いつか一しよにゐる人も忘れてしまつて、私はただ一

硫黄

靡

乙女峠、二子山  
共に箱根山に  
あり。

懶

炬燵

人で天地の中に居るやうな気がした。又天地も自分も無いやうな気がした。  
ふと我に復つて置炬燵にしがみついて黙つてゐる連中の顔を、驚いた心をもつて眺めた。そして私は何か考へなくてはならない事があつて、それが何であつたか忘れてしまつて、思ひ出せないやうな気が暫くの間してゐた。

大分理に落ちて來た。こんな通信は書くものではない。

(窪田空穂—現代書翰文選)

窪田空穂

歌人。名は通治。  
長野縣の人。早  
稲田大學教授。  
東京專門學校出  
身。明治十年六  
月生まる。

サギゴケ



イヌノフグリ



繖

### 二五 蟲出づる頃

かりそめに轉びし庭の枯芝に

青き芽見出で驚きしかな

寒い風が温かく、淡い日光が強い白さになると、自然は春の野外劇の準備に忙しくなる。

青空にさへづる雲雀の歌と、日向の草土手に氣兼ねらしく咲く、サギゴケやイヌノフグリの花に縋りついてゐる小虻との合唱に、野外劇の幕は開かれる。

それは年年同じ藝題を繰り返すのだが、昔から今日まで忠臣藏が少しも廢らないやうに、何度繰り返されても少し

規模

翅

栽培

も興味が減ることはなく、いつも涌くやうな人氣である。

無論その規模、演出の技巧、又その綿密さに於いて、自然の野外劇は人間のそれとは比較にならぬ程優れてゐる。

何時何處から生まれ出たかと思はれる、白地に黒い紋附の翅をもつた中形の蝶蝶が、さも樂しげにひらひらと、或は大根の花を求めて、或は蜜を求めて花の間を飛び廻つてゐる。僅か十歩の菜畑の上にも、その生活の縮圖が美しく示される。野外劇の序幕はこの白蝶の舞踊に始まるといつてよからう。

しかし白蝶は、蝶仲間でも最も平凡のものとして輕視され、その幼蟲の青蟲は吾吾の栽培する十字科植物の油菜、大



水スマシ

根等の葉を食ふ害蟲であるが春のおとづれを告げる第一の使者として私はこの蝶に敬意を拂ふものである。冬の間は全く休業して居た畔の小溝が春の讚歌を合唱し始めるとそれにつれて蟲界の名ダンサー水スマシは、真先に得意のダンスを舞ひ始める。

すいすいと進み行く流の上葦や杭の立ち竝んだ間に、妙技を揮つて散歩の人の眼をひき止める小豆大の黒光のする身體脊には陽が白く銀の豆のやうに光つて見える。彼等は流に逆らひながら、さも身輕に水の面をくるくると渦を巻いて走る。そして人の足音や一寸物音がすると、眼にも止まらぬ速さでまはり始め、更にひどく驚くとダンス

を止めて、周章てて水の中に潜つて行く。

そして水底の木片や小石の下に潜り込んで、暫くちつと様子を窺ひ、もう大丈夫と思ふと又ついと水面に出て、ダンスを續ける。その敏速な妙技は蟲界第一である。水面を走ることでは、アメンボも一廉の選手には相違ないが、その技は水スマシと比べてはお話にならない。

なほ水の中には、へうきんな體つきをしたゲンゴラウ、山賊のやうな面構に大鎌みたいな二本の前脚を擴げて泳ぐタガメ、まるで棒切れのやうな野暮な色と恰好をした水カマキリ等、いづれも劣らぬ水中の追剥、辻強盜連が、互に牙を鳴らして睨み合つてゐる。



アメンボ

ゲンゴラウ

タガメ

水カマキリ

杭

長い冬眠から覺めた蜜蜂は朝早くから花を訪ね、蜜と花粉とを集めて子孫を養ふべく奮闘を始め、熊蜂の雌は隠れ家を出て新しい家庭の建設に取りかかる。花蜂は叢に野鼠の巢を探して、おのが巢を營むべく活動を始め、大工蜂は枯杭に穴を穿つて子供の養育室を建て、壁屋蜂は泥を含んでこれ又育兒室を造る。

塊

くは。(唾)

庭石の傍では小蟻がせつせと細かい土塊を唾へ出して巢を造り始める。皆子孫の爲にいそいそとして働いてゐる。梅の若芽が伸び、桃の花が散つて、青い芽が顔を出して暫くすると、鮮かな緑が何時しか灰色の網で包まれてしまふことがある。見ると二三分ほどの水色のいやらしい毛蟲が

ゴマダラヒトリ



代償

草カゲロフ



うじやうじやと群がつてゐる。

また裏庭に生えた露の葉が食ひ荒されて臺なしになつてゐることもある。これは大抵灰色の長い毛をもつゴマダラヒトリといふ蛾の幼蟲の仕業である。

草花の莖にアブラ蟲がたかつてゐる。その間を黒蟻が徘徊してアブラ蟲から蜜を貰ひ、代償として無力のアブラ蟲を保護する。さうした蟻の警戒の裏をくぐつて草カゲロフなどの幼蟲はこのアブラ蟲を食つて歩く。

春の樂園も裏をのぞいて見ると、恐しい生存競争の大悲劇舞臺である。生きるもの死ぬもの、食ふもの食はれるもの、それ等のものが各、生命を完うし、子孫の繁殖を計るべく奮

盡

闘努力するさまは、蟲ながら實に敬服に値する。

路傍に庭園に蠢蠢として動く無心に見える小蟻の一舉一動にも、深い思慮と大きな意味とが含まれてをり、花に寄



横山 桐郎

り添ふ胡蝶の舞も單純な悦樂ではない。生物界の生存競争の大活劇は、先づ陽春三四月に幕を切つて落し、細かい蟲と蟲、蟲と植物との争闘に始まり、やがて幾千幾萬の蟲は續續と舞臺に現れて、各得意の演技を揮ふ。

その千態萬様十人十色の妙技の表現は、正に他の生物界には見られない興味である。蟲の研究、それはつまらぬ仕事

眞髓

横山桐郎

東京の人。農學博士。東京帝國大學農學部出身。東京農業大學教授。昭和七年八月歿す。(二五四年—二五九二年)

のやうである。だが、その底に潛む興味の眞髓、彼等によつて示される尊い教訓、深刻な諷刺は、忠臣藏以上に吾吾に訓へてくれる。

私は多くの人が蟲にもう少し同情と理解とを持ち、蟲を研究する人達に、今少し尊敬を持つてほしいと思ふ。日本の昆蟲學は餘りに貧弱であり、昆蟲學者は餘りに輕視されてゐる。(横山桐郎—蟲の世界を探ねて)

齋藤 茂吉

○ 足もとの石のひまより静けさに顫ひて出づるこほろぎの聲

島木 赤彦

○ すいと蟲疊のうへに鳴きてをり、蠶をあげしわが家のうちに



蔓

愚癡  
癡痴  
樫

### 二六 藤蔓と樫の木

藤蔓が山を這つてゐながら、

「詰らないな、地面を這つてゐては詰らないな。牛や馬に踏まれたり、食はれたり、折角花が咲いても人に見て貰ふことも出来なくては、本當に詰らないな」と愚癡をこぼしてゐました。これを聞いた樫の木が、可哀さうに思つて、

「では此處までおいで。僕が助けて上げるから」と聲をかけました。すると藤蔓は喜んで、

「あり難うございます。どうぞお助け下さい」とよちよち這つて、やつと手をさし伸べました。樫の木は黙つて、その手を

自分の體に巻きつけました。

藤蔓は非常に力を得て、

「この御恩は死んでも忘れません」とお禮を述べました。さうして、これからは夜も晝も晝もずんずん伸びました。

暫くのうちに、樫の木の幹を七卷半も巻いて、枝のある處まで巻きつきました。

「おいおい、藤君。僕の枝を餘りひどく巻いてはいけないよ。葉の邪魔にもなるから。」

「はい、承知しました。」

けれども樫の木の枝に辿りついた藤蔓は、自分も枝を八方へ出して、だんだん樫の木の幹や枝に巻きつきます。

辿

邪魔

廂

「おい、そんなに細かな枝にまで巻きついては困る。葉が覆はれると、呼吸がされなくなるぢやないか。」

「はい、承知しました」といひながら、藤蔓は遠慮會釋もなく、ずんずん伸びて、檜の木の上まで自分の葉を廣げます。その上、蔓も段段太くなつて、強い力で檜の木の幹や枝を締めつけます。

氣の毒なのは檜の木です。廂を貸して母屋を取られるといふ譬のやうに、地を這つてゐた藤蔓を可哀さうに思つて手を引いてやつたところが、今ではどちらが主人公か分らないほど、藤蔓がのさばり返つてゐます。

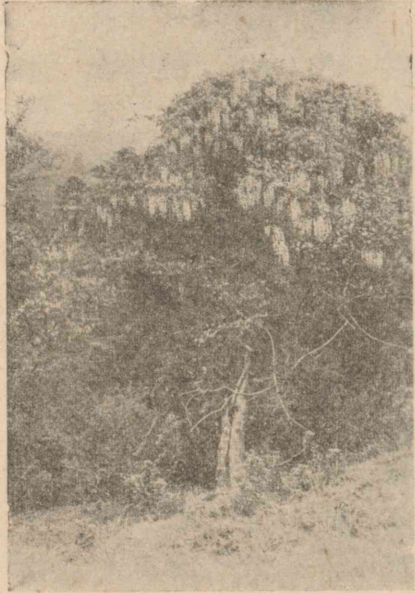
「ああ、こんな事なら、藤蔓を助けてやるんぢやなかつた。」

いくら後悔しても追ひ付きません。自分の幹に力を入れて、藤蔓を張り切つてやらうと試みましたが、蔓の方が強い

ので、どうする事も出来ませんでした。

何年か経つた後、或暖かな春の事です。藤蔓には綺麗な花が咲きました。

「どうだ、檜の木さん、とう



藤の花

とう私に春が來ました。御覽なさい、こんなに見事な花が咲きましたよ」といつて、長い花を房房させて威張つて見せました。けれども、檜の木は花見どころではありません、死ぬか

生きるかの境です。幹は締められ枝も葉も藤蔓の枝や葉に妨げられて、日の光さへ見る事が出来ませんで、元氣が次第に衰へて今は蟲の息です。

「ねえ藤君頼むよ。どうか少し僕にも日の光を拜ませてくれたまへ。」

涙を流して頼みます。けれども藤は、

「今更仕方がありません。そんな泣言なんかいはないで、私の出世を祝つて下さい。」

「君の出世は一體誰のお蔭だと思ふ。昔の事を思つたら、少しは僕のいふ事も聞いてくれていいぢやないか。」

「いや、樫の木さん。昔は昔、今は今です。私の出世が羨ましい

なら、貴方も生まれ代つて出直すことです。」

いかにも人を馬鹿にしたやうに申します。

樫の木は怒つて、地團駄を踏みました。けれども何とも手向ひが出来ません。口惜し涙をほろほろこぼして、泣寝入に寝入るより外はありませんでした。

それから又何年か経ちました。

樫の木は精氣が盡きて、とうとう枯れてしまひました。

藤蔓は得意になつて、毎年春を迎へては枯木の上で花を咲かせて、威張つてゐました。

ところが或年、丁度藤の花の盛に、風も吹かないのに樫の枯木がどしんと大きな音を立てて倒れました。さうして折

敲

角美しく咲いてみた藤の花は、不意に高い所から眞逆様に地面に敲きつけられました。

「どうしたんだらう？」

藤蔓が膽を潰して周圍を見ました。大蛇のやうな自分の體は、ぼくぼくに腐つた樫の枯木を抱いて、地の上にのたうつてゐます。その上、葉も花も二た目と見られない程みじめな姿で、藪の中に散らばつてゐます。

「ああ、こんな事なら、あんなに強く樫の木を締めつけるんぢやなかつたに」と後悔しました。

が、間もなく山の持主が来て、藤蔓を粉微塵に碎いて、薪木に交ぜて火にくべてしまひました。(八波則吉「詩味情味」)

微塵

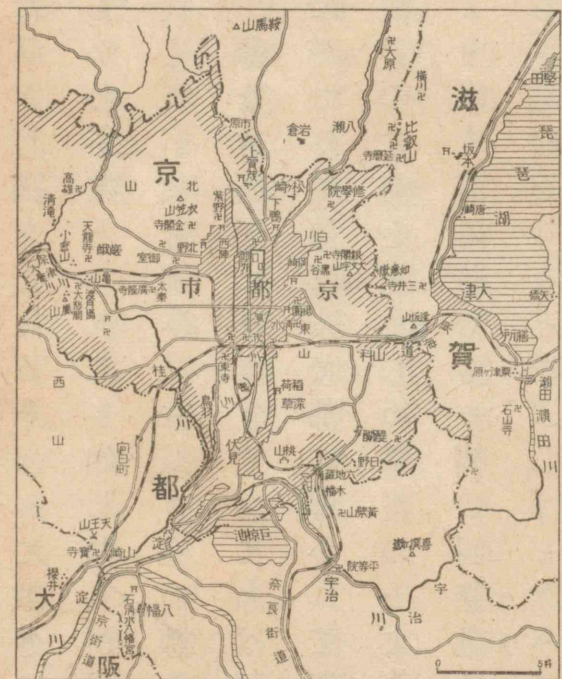


大原女 (土田麥僊筆)

東寺  
教王護國寺とい  
ふ。京都市下京  
區にあり。眞言  
宗總本山。

二七 京都の春

東寺の塔は睦まじく我を迎へて立ち、鴨川の水は懐かし



く我を迎へて歌ふ。最  
愛の母に逢ふに似た  
るはいつも京都に著  
きたる時の心地なり。  
山紫に水明かなる  
ところ、唯夢の如く、現  
の如く、三條を渡り、四  
條を渡ること、日に幾

つづじ(躑躅)

如意が嶽

比叡の一分峯。俗に大文字山といふ。

嶽一岳

たぐひ(類)

清水觀音

東山の一峯音羽山の麓にある清水寺の本尊千手觀音なり。

四條畫

松村吳春を祖とする畫風。

ある(藍)

八幡

京都府綴喜郡

山崎

同府乙訓郡

たびぞ。躑躅を柴に折り添へて戴きつれたる大原女も、いつしかわが友となれるが如し。如意が嶽より吹きくる春風は、軽くわが袖を拂ひ、又絲長き堤の柳を吹く。

類なき晴天に心浮き立ちて、人は西へ東へと群れ行く。花に誘はれて佛に詣で、佛に導かれて花を看る客、けふも清水觀音の堂前を充たしぬ。舞臺の上より見おろす人、舞臺の下より咲き誇る花、恰も一幅の四條畫なるに、姥はこの間に立ちて、蕨餅召せなど呼ぶ。しばし休みて眺め渡せば、淺黄に、藍に霞み渡れる八幡山崎の邊も面白きに、東寺の塔を松の間に墨がきなせる筆の力こそ工なれ。

燈火の影は水に映りて星の如く、花の如し。祇園の夜櫻看

神山

祇園の八坂神社の山。

ほのぼ(箒)

御室

仁和寺をいふ。眞言宗。京都市右京區にあり。

うぐひす(鶯)

こすゑ(梢)

點綴

たけなは(閑)

んとする人は神山へと向ふ。一もとの老木は枝を垂れて篝火の燄に護られ、寒からぬ雪は雲なき空よりこぼれて顔を撲つ。田樂を賣る聲、茶を勸むる聲、この花の前後に山彦を反し來れり。

西山の花見る人は、多くまづ御室を指す。松青く、樓門赤く、茶煙絶え絶えに颯りて、花きはめて白し。塔は霞を洩れて松風の外に聳え、鐘樓は昔を説きて香雲の中につつまる。誦經の聲遠く響きて、鶯の歌とこしなへに高き梢にあり。

重なる岩根を踏みしめて立つ松、その間を點綴して咲きほこる花、嵐山の春こそ今閑なれ。小舟に乗りて漕ぎゆく人あり、岸のこなたにて眺むる人あり。一すぢの渡月橋は錦の

大堰川  
桂川の上流にし  
て嵐山の麓を流  
る。

大悲閣  
嵐山の山腹にあ  
り。千手観音を  
安置す。  
柳櫻をこきませ  
て

大秦  
京都市右京區。  
廣隆寺  
眞言宗。推古天  
皇の朝、秦河勝  
建立。



大 堰 川

ごとき袂を載せて、この大堰川を横ぎり行かしまむ。水清く、岩を洗ひて玉と碎け、山白く、煙は離れて空にかがよふところ。この美はかの美と相映じて、自然の彩色をなす。阪を登りて大悲閣に至れば、眼下に展げられたる一幅の圖、柳櫻をこきませ、恰も西陣を織り出だせるが如く、また友禪を染めなせるが如し。

途に太秦を過ぎて廣隆寺を訪ふ。夕陽靜かに鐘樓の瓦を染めて、春もの寂し。茶店あれども客來らず、老媪は落花を風に任せて睡

磔

叡山  
比叡山の略。京  
都の東北に峙  
つ。

大和田建樹  
國學者。愛媛縣  
の人。高等師範  
學校、女子高等  
師範學校教授。  
明治四十四年十  
二月歿す。(二五  
一八年―二五七  
一年)

り、兒童は仁王尊に紙磔を打ち著けて去る。暮色は東山を籠め、叡山をめぐり、やうやう鴨川に襲ひ來れり。清水の塔も半ば隠れぬ。大文字の迹も姿を隠しぬ。紫に紅に藍に墨に、見る見る色どられゆく山影、薄く濃く青く黒く消されゆく人影、詩中の物ならぬは無し。天地ただ平和、四顧ただ寂寞、顧みれば西山もなく、北山もあらず。

(大和田建樹「雪月花」による)

花のやま二町のばれば大悲閣 芭蕉  
嵯峨まではみごと歩みぬ花盛り 荷兮  
嵯峨ひと日閑院様のさくらかな 蕪村  
堀河や家のしたゆく春の水 太祇

二八 ただの人

熊澤蕃山

雲のかかるは

月のため

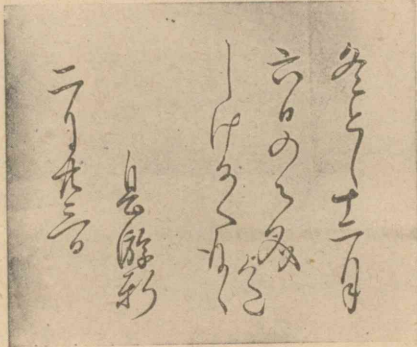
かぜの散らすは

花のため

雲と風との

ありてこそ

月と花とはたふとけれ



熊澤蕃山筆

熊澤蕃山

儒者。名は伯繼、通稱次郎八、蕃山はその號、又息游軒と號す。京都の人。池田光政に仕ふ。元祿四年歿す。(二二七九年—二三五一年)

冬とし十二月六日の御文かたじけなく存候  
息游軒  
二月廿三日

二川相近

筑前福岡藩の學者、幕末の人。大隈言道の師にして和歌及び書畫に長ず。

二川相近

みよし野

奈良縣吉野郡吉野町。

花よりあくるみよし野の  
春のあけぼの見たらば  
もろこし人もこま人も  
やまところになりぬべし

加藤司書

加藤司書

勤王家。名は徳成。筑前藩の家老。慶應元年十月幕府の嫌疑を受け自殺す。(二四八〇年—二五二五年)

小初瀬

奈良縣磯城郡初瀬町。

よし野の山も小初瀬も  
はなが咲かずばただの山  
曾我兄弟も大石も  
かたき討たずばただの人



## 二九 西郷南洲

### 西郷南洲

名は隆盛。南洲はその號。鹿兒島藩士。明治維新の元勳。陸軍大將。明治十年九月官軍に抗し城山に死す。(二四八七年 二五三七年)

### 高輪

東京市芝區にあり、江戸幕府時代ここに薩摩藩邸ありき。

西郷南洲はどれほど度量が大きかつたか分らぬ。高輪の一談判で自分の意見を容れたばかりでなく、江戸全市鎮撫の大任まで一切自分に任せて少しも疑はぬ。昨日まで敵身方であつたといふことは、何處かへ忘れてしまつたやうだ。その度量の大きいことには自分もほとほと感心した。官軍が品川まで押し寄せて来て、今にも江戸城へ攻め入らうとする際に、西郷は自分が出した唯一本の手紙で、芝田町の薩摩屋敷までその談判にやつて来た。當日、自分は羽織袴で馬に跨つて、従者を一人連れたのみで出かけた。先づ一



西郷隆盛と海舟との會見  
(聖徳記念繪畫館畫)

室へ案内されて暫く待つて居ると、西郷は庭の方から古洋服に薩摩風の下駄を穿いて、例の熊助といふ忠僕を従へ、平氣な顔で出て来た。これは遅刻しまして誠に失禮と挨拶をしながら座敷に通つた。その様子は少しも一大事を眼前に控へたものとは思はれなかつた。さて愈、談判になると、西郷は自分のいふことを一一信用してくれ、その間に一點の疑念をも夾まない。色色難かしい議論もありませうが、私は

社稷

自家撞著

屯集

天空海關

勝海舟

通稱麟太郎。後ち安芳と改稱せり。海舟はその號。伯爵。舊幕臣。海軍卿を経て樞密顧問官となる。明治三十二年一月薨す。(二四九三年—二五五九年)

一身にかりて御引受けしますと、かういふのだ。西郷のこの一言で、江戸百萬の生靈もその生命と財産とを保つことが出来、徳川氏も亦その社稷を保つことを得たのだ。若しこれが他人であつたら、いや、貴様のいふことは自家撞著だとか「言行不一致だ」とか、澤山の暴徒があを通り處處に屯集して居るのに、恭順の實が何處にある」とか、色色喧しく責め立てたに違ひない。さうなると談判は忽ち破裂だ。しかし西郷は流石にそんな野暮はいはない。よく大局を達観する明と大事に處する斷とをもつてゐた。

その膽量の大きいことはいはゆる天空海關で、見識ぶるなどといふことは固より少しもなかつた。(勝海舟—水川清話)

### 三〇 開口録

#### 一、蜈蚣期に後る

群蟲京都に會議す。いはく、わが儕亦幸に神邦に生まる。何ぞ伊勢兩宮に拜謁せざらんと。群蟲皆同ず。約していはく、明朝各、まさに大津の驛に會し、相偕に伊勢に向ふべし」と。翌朝各行装を具し大津の驛に會す。蜈蚣獨至らず。使を馳せてこれを促す。乃ち使に對ひていはく、われ足衣草鞋著け畢りて、則ちまさに追ひ及ぶべし。公等まづ發せよ」と。群蟲乃ち相伴ひて發す。伊勢兩宮に拜謁し、三日を経て歸る。蜈蚣なほ未だ至らず。怪しみてその居を訪へば、蜈蚣なほ草鞋を著くるを

大津  
滋賀縣大津市  
蜈蚣

やめず。群蟲の至るを見て驚き謝していはく、僕足衣に於いては、昨夜乃ち著け畢る、草鞋に於いては則ち未だ著け畢らず。故に期に後る。謹んで罪を謝す」と。(前戯録)

二、雀を捕る術

人あり、友人に語つていはく、吾に雀を捕ふる術あり」と。友人のいはく、聞くを得べきかと。その人いはく、この術盛夏に在りて尤も妙となす。多く柿葉を屋上に列ね、各小石を以つてこれを鎮め、糟を葉上に盛る。雀來りてこれを食ふ。既にして爛醉し、石を枕にして臥す。驕陽赫として雀柿葉に捲き籠めらる。乃ち帚を用ゐて一拂す。一舉にして雀數斗を得べし」と。(開口新語)

糟

三二 花に教へられて



原 温 亭

ではなかつた。私の身體が以前に倍した健康を作つたことも利益の一つではあるが、もつとそれ以上に教へられた或物があるやうな氣がする。

私は地上に種子を蒔いて見た。果して雙葉の苗が生まれ  
て來た。これは私共が自然に向つて一つの挑戦を試みる時、

過去十年間、私は園藝に従事してゐた。それはまことに偶

然から始まつたことで、決して自ら計畫したり希望したり

したのではなかつたが、植物に親しんだ結果は決して無益

自然は私共を無視せずして、それに對して應戰してくるのである。私はこれを知つた時、感謝の念が起つた。それからその苗は私共が蒔いた所にのみ生えて、蒔かなかつた所には何も生えなかつた。更に又ダリヤの種子を蒔いた時に、ダリヤの苗が生えて、決して菊の苗も撫子の苗も生えなかつた。私は又、自然が決して人を馬鹿にもせず、眞正直に相手になつてくれることを知つて、本當に感謝しない譯には行かなかつた。

苗は肥料をやれば、ずんずん育つが、打つちやつて構はないと日に日に衰へる。蔓物なれば竹を立ててやる、手を延ばして絡んで來る。枝をすぐつてやる、脇芽を摘んでやる。そし

絡

履苔

て大きな花が咲く。人の思ふことが一一植物に通ずるのだ。かうした經驗から、又私共は自然の順序といふことを考へさせられる。芽生えから直ちに花は咲かぬ、又實はならぬ。雙葉が出てから本葉が出る、幹を延ばす、それから枝が出る、苔が出る、花を開く、實を結ぶ。この順序はどうしても履まねばならぬ。東京から大阪に行くには決して一飛びでは行けぬ。一步一步行かねばならぬ。汽車に乗つても、品川、大森を通過せねばならぬ。かうしたことが能く頭に這入つてゐたら、人は秩序ある進歩を信ずるであらう。

ダリヤでもよい、菊でもよい、それは何でも構はぬ。それらをなり次第に任せて置いたらどうだ、勝手氣儘に抛つて置

抛

旬



温 室 の 内 部

いたらどうだ。それは人の言動が盡く善いものでないやうに、決して旨く行くものではない。だから私共は竹を立ててやる、そして彼等の姿勢を正しくする。思ひ切つて枝を取り去る、脇芽や蒼を減じてやる。そして中心と左右とに立派な花を咲かせる。若しこれを彼等の思ふままに任せたら、上へ立つべき幹は倒れて匍ひ廻り、無数の枝と花とをつけて、見るべきものは皆無となつてしまふであらう。一尺に咲くべ

き花も一二寸となり、盆大であるべきものも杯の如く小さくなつてしまふであらう。教育の必要がそこにある。

私共は永久に日本國民である。それは菊がダリヤとならぬやうに確かな事實である。けれども、私共の生活そのものは日に新しく、日に若く、そして日に力づくよく發展して行かねばならぬ。そこに私共の精神的文化が建立され、随つてわが國運も歩一步進んでやまぬことにもなるのである。

私共の先人は時候外れの返り花を不吉なものやうに考へたが、又地室を掘つて、地中熱を利用して、寒中に木瓜や梅や櫻の盆栽を咲かせることも知つてゐた。これは返り花

盆栽

蔬菜

篠原溫亭  
俳人。名は英喜。  
熊本縣の人。國  
民新聞社員。大  
正十五年歿す。  
(一五三二年—  
二五八六年)

から思ひついて春の花を早く咲かせたのに過ぎない。現時  
盛に行はれてゐる硝子張の立派な温室はこの地室の發達  
したものに過ぎない。しかもこの温室はさうした情力を利  
用するに止まらずして、積極的に種子から蒔きつける。日本  
に出來ないバナナやメロンも作る。今日見る冬季の洒落た  
花や蔬菜はこの温室の賜である。かうなつて來ると、返り花  
は發明の恩人と言はねばならぬ。かうしたことは世間から  
見て不自然であらうかも知れぬ。しかし園藝家は自然に等  
しきものを自然に反しない方法を以て作るのである。私は  
これも亦自然といひ得ると思ふ。(篠原溫亭—の後)

春のはじめ  
文治三年二月  
いたはし

宴

安宅  
石川縣能美郡に  
あり。但當時の  
關の址は、今海  
中に陥りたりと  
いふ。

三三 安宅

時しも頃は春のはじめ、風まだ寒き北國路をいたはしや  
義經は、兄頼朝の疑をうけ奥州さして落ちて行く。主從僅か  
に十二人、辨慶を先達に、山伏姿に身を糞し、日數程經て加賀  
の國、安宅の港に著きにけり。

義 「いかに辨慶、旅人等のうはさによれば、安宅には特に關  
を設けて、山伏をきびしく取り調ぶるよし如何にすべ  
きぞ。

辨 「これはゆゆしき御大事なり。きつとこれにて御工夫あ  
るべし。」

人人「いやいや、何程の事かあらん。ただ打ち破つて御通りあるべし。」

辨「いやいや、打ち破らんは易けれども、大事の前の小事なれば成るべく穩かなる手段を取りたし。」

義「然らば辨慶ともかくもその方の工夫に任せん。よろしく計らひくれよ。」

辨「畏つて候ふまづ考へ出だしたることは我等かく山伏に身を窶せども、包み難きはわが君の御品格なり。畏ながら、暫く強力に御身を窶され、御笠深く召され、我等の笈を負ひて、わざと後にさがつて御通りあれかし。さなくば忽ちに見出だされ候はん。」

おひ(笈)

義「げにげに、これは尤の事なり。」

姿をやつし主従は、やうやく關に近づきて、通らんとすれば關の役人富樫左衛門、

富「やあやあ山伏、關なるぞ。名を名のれ」とぞ呼はりける。

辨「承つて候ふ。これは奈良東大寺建立の爲に、北陸道を勸進する山伏にて候ふ。」

富「これは殊勝トクショウの事なれども、

うけたまはる  
(承)  
東大寺建立  
治承四年、平重  
衡に焼かれし故  
の再建なり。



安宅の舞臺面

いはれ

山伏なるからは、この關は通しがたし。  
辨 「してそのいはれは。」

富 「さればなり、頼朝、義經御不和により、義經殿には山伏と  
姿をかへて、奥州へ落ちらるる由故に諸國に新關を設  
けて、山伏をかたく止むるなり。一人も通しがたし。

辨 「承つて候ふ。しかし、贗山伏をこそ止めらるべけれ、まこ  
との山伏を止め給ふ要は候はじ。

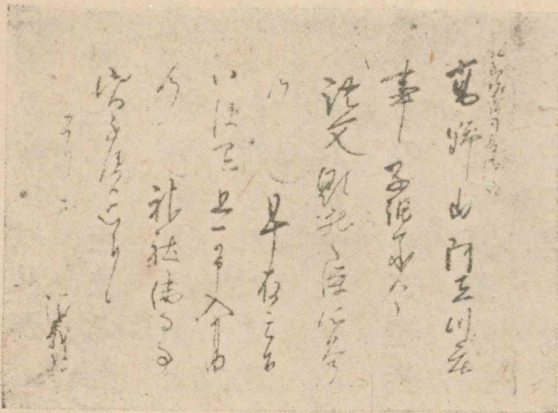
富 「あらむづかし。論より證據なり。まこと東大寺建立の勸  
進ならば、勸進帳のあるべき筈ぞ。ここにてそれを讀み  
上げられよ。某これにて、聽聞せん。  
辨 「何と、勸進帳を讀めとや。心得申して候ふ。」

質

證一証

つづり(綴)

高野山阿豆川  
庄事、子細承候  
了、證文顯然之  
條、所見及候也、  
早存、其旨、以  
便宜、且可申、  
入事由、候也、神  
社佛事、實不  
便候、恐々謹言、  
五月二日  
源義經  
くれなゐ(紅)  
沈一沉



く見とがめて、

もとより勸進帳のあらばこそ、笈の中より在合せの巻物  
一つ取り出だし、勸進帳と名づけつつ、即智を以て文を綴り

まことしやかに聲高高と、天も響  
けと讀み上げけり。富樫つくづく  
聞きすまし、

富 「最早疑は晴れて候ふ。御通り  
候へ。」

辨 「かたじけなく候ふ。」

げにや紅は、園生に植ゑてもまぎ  
れなし。後に隨ふ強力を富樫目早



富 「いや暫く、その強力は通し難し。とどまれ。

と罵りぬ。すは我が君をあやしむは、一期の浮沈と仰天し、皆

一同に立ちどまる。辨慶騒がずそらとぼけ

辨 「やい強力め。何とて早く通らぬぞ。

富 「いや、それはこなたより止めたるなり。

辨 「それはまた何故。

富 「あの強力が姿、義經殿に似たる故なり。

辨 「奇怪、千萬、義經殿に似たりとや。しかいはるる強力めは、

一生の名譽ならんが、さりとは腹立たしや。けふのう

ちに能登境まで行かんと思へばこそ、強力雇ひたるに、

僅かの笈を重げに負ひて、人人に後るればこそ、貴人か

ゆゑ(故)

さかひ(境)

とも怪しまるれ。憎さも憎し。いで懲らしてくれん。

金剛杖をおつ取つて、さんさんに打擲す。

これはと驚く人人を、辨慶目にて制しとめ、尙も激しく打

ち据うる。富樫やうやく疑念を釋き

富 「これは我等が誤なり。その強力には構なし。とくとくとく一

同御通りあれ。

いふに人人ほつと息、毒蛇の口を逃れし思、さらばさらばと

立ちあがり、關路をあとにしづしづと、奥州さして下りけり

(坪内逍遙)

すうる(据)

打擲

坪内逍遙

文學博士。名は雄藏。早稻田大學名譽教授。明治大正文學の大功勞者。愛知縣の人。昭和十年二月歿す。(二五五年)









鳥

年

有

書



庫  
L1  
27

広島大学図書  
2000040727

